

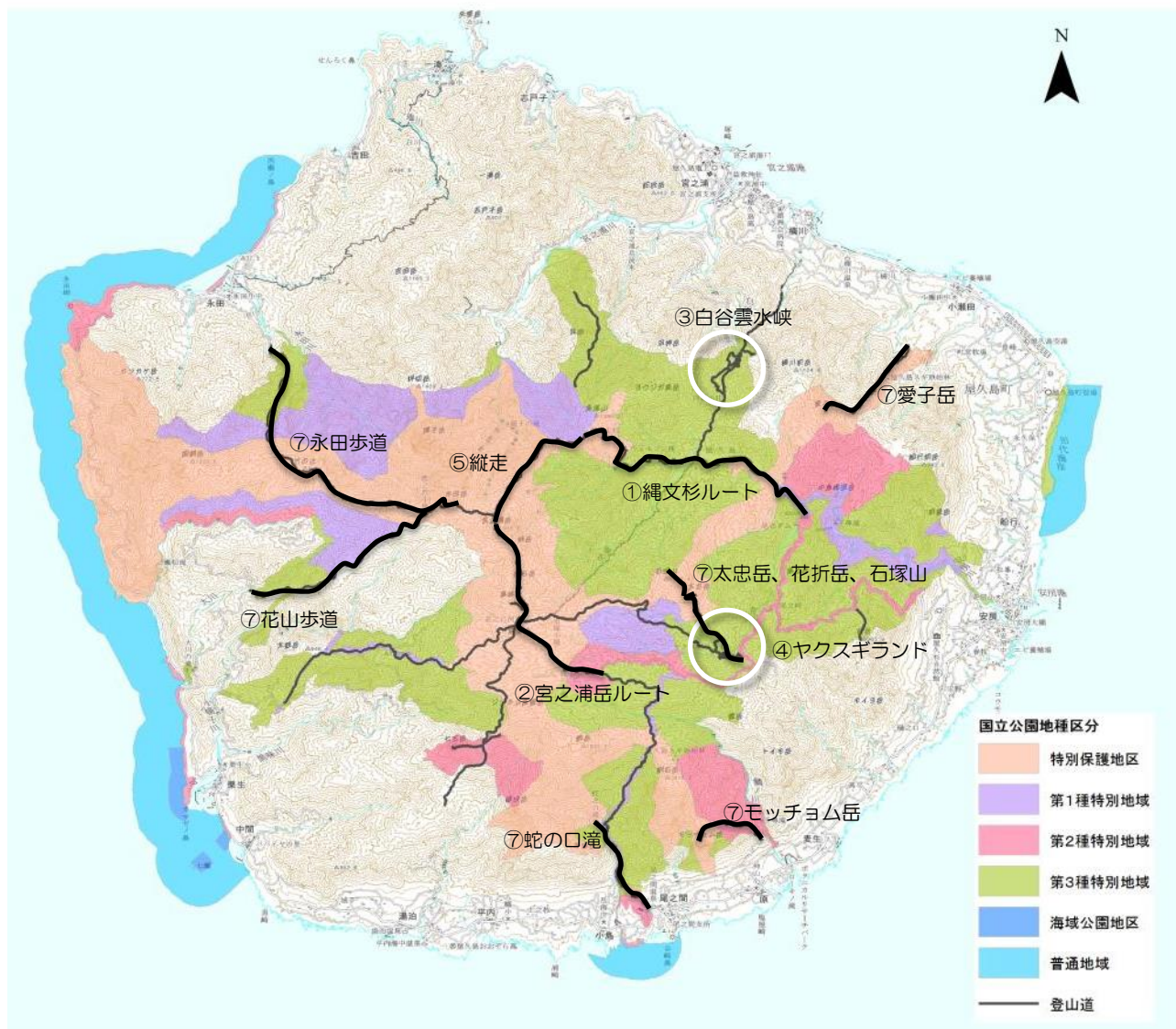
登山者数推移と山岳部遭難

1. 屋久島の遭難概要

(1) 遭難状況

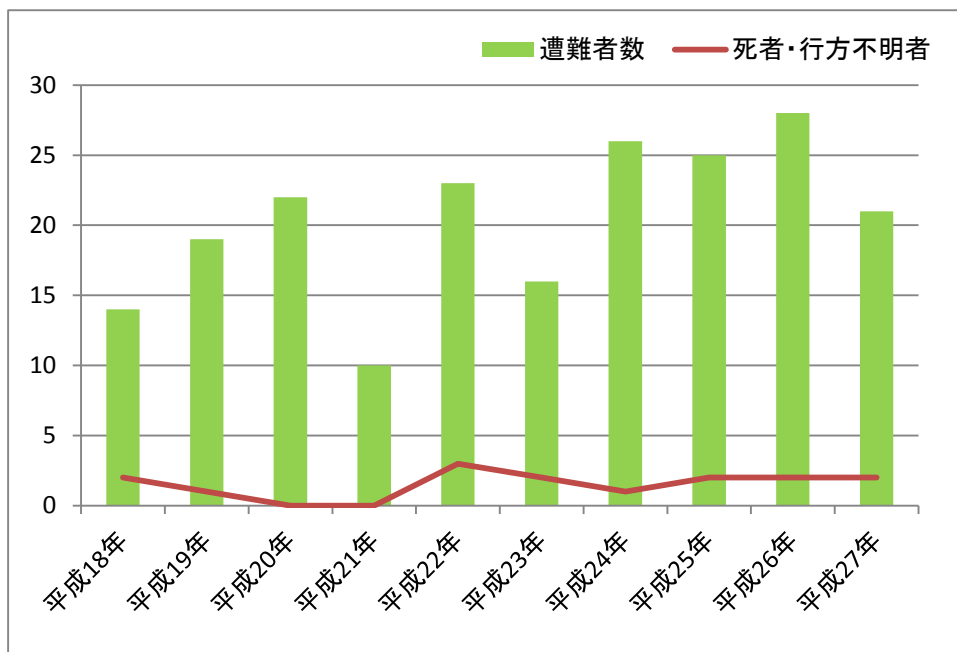
屋久島の主要な登山ルートにおける遭難状況をとりとまとめた。

- ①縄文杉ルート（荒川登山口～高塚小屋）
- ②宮之浦岳ルート（淀川登山口～宮之浦岳）
- ③白谷雲水峡
- ④ヤクスギランド
- ⑤縦走（宮之浦岳～高塚小屋）
- ⑥永田岳方面（永田岳、花山歩道、永田歩道）
- ⑦その他のルート（愛子岳、モッチョム岳、蛇の口滝、太忠岳・石塚山・花折岳ほか）



屋久島の遭難者、死者・行方不明者は、過去 10 年間では平成 24 年から平成 26 年が高い値となっている。
 また、10 年前の平成 18 年と比較して遭難件数 1.4 倍と増加傾向にある。

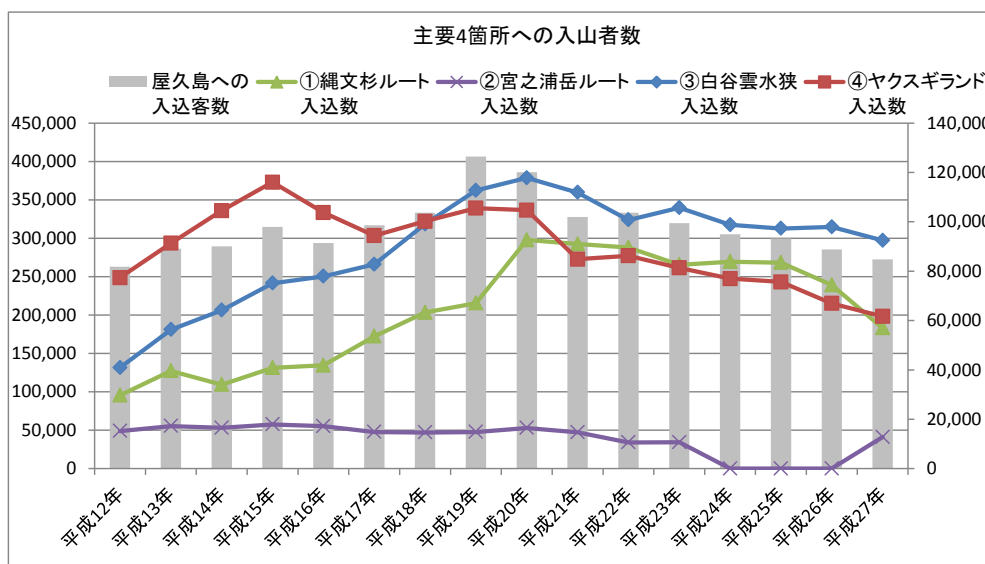
	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	合計
遭難者数	14	19	22	10	23	16	26	25	28	21	204
死者・行方不明者	2	1	0	0	3	2	1	2	2	2	15
負傷者	5	1	1	1	1	0	0	0	1	2	12
無事救出者	7	17	21	9	19	14	25	23	25	17	177



図表 過去 10 年間の遭難発生状況

遭難のほとんどは入込数の多い①縄文杉ルート、②宮之浦岳ルート、③白谷雲水峡、④ヤクスギランドで発生しており、過去10年間遭難者数のおよそ8割を占めている。

	①縄文杉ルート	②宮之浦岳ルート	③白谷雲水峡	④ヤクスギランド	⑤縦走	⑥永田岳方面	⑥永田岳方面	⑥永田岳方面	⑦その他								合計	うち死亡 行方不明
	荒川登山口～高塚小屋	淀川登山口～宮之浦岳			宮之浦岳～高塚小屋	永田岳	永田歩道	花山歩道	愛子岳	モツチョム岳	太忠・石塚・花折	七五岳	ランド線	蛇の口滝	その他			
平成18年	8	1	4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	14	2
平成19年	9	3	3	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	19	1
平成20年	8	2	4	1	2	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	1	22	0
平成21年	5	0	2	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	10	0
平成22年	12	4	5	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	23	3
平成23年	4	4	0	1	1	0	1	0	0	1	0	0	1	0	3	16	2	
平成24年	7	5	8	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	3	0	26	1	
平成25年	11	1	3	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	2	3	25	2	
平成26年	13	3	3	1	0	2	0	0	0	1	1	1	0	3	0	28	2	
平成27年	8	6	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	21	2	



図表 ルートごとの遭難発生状況

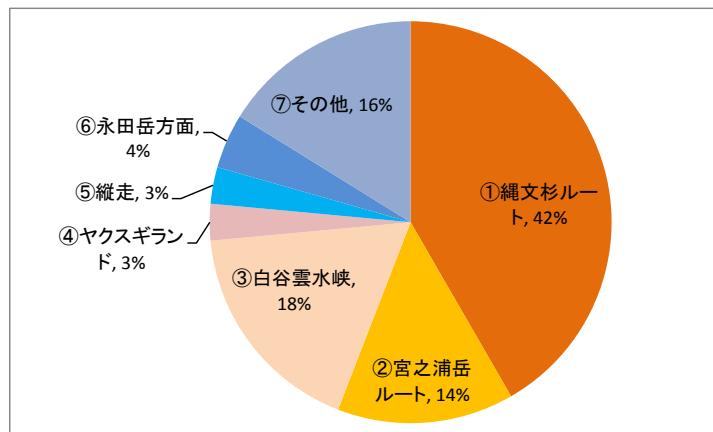


図 過去10年間のルート別遭難者の割合

(2) 年齢層別

平成 26 年には 40 歳以上の遭難者が全遭難者の 7 割を占めている。また過去 10 年間では、20 代、30 代の遭難者はそれぞれ、2 割程度であり、単独での入山増加が要因の一つと思われる。他の山域と比較すると、平成 27 年度において遭難者数の多い他の山域（北アルプス北部、北アルプス南部、南アルプス、奥多摩・奥武蔵）では 30 代以下の遭難者割合は 2 割前後であるが、屋久島ではおよそ 3 割を占めている。また、平成 27 年度屋久島世界自然遺産地域における利用の適正化に向けた検討及び利用に関するモニタリング実施業務報告書（以下「平成 27 年度報告書」と省略）アンケート結果からは主要ルート（荒川登山道～縄文杉（往復）、白谷雲水峡内、ヤクスギランド内、白谷雲水峡（楠川登山口）～淀川登山口、淀川登山口～縄文杉・宮之浦岳等（往復））利用者の年代別割合をみると 30 代以下が 4 割以上を占めている。このことは、屋久島での遭難者が、他山域よりも若年層割合が高くなる要因となっている。

表 年齢層別遭難者数

	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
10代	0	0	0	3	0	0	1	1	2	0
20代	0	4	4	2	6	6	6	9	2	1
30代	1	5	3	2	7	1	5	5	3	5
40代	0	1	6	1	1	3	2	3	3	6
50代	1	5	3	0	1	0	3	2	7	3
60代	5	4	2	1	3	4	8	4	8	2
70代	2	0	1	1	2	1	0	0	3	3
80代	0	0	2	0	0	0	1	1	0	1
不明	5	0	1	0	3	1	0	0	0	0
合計	14	19	22	10	23	16	26	25	28	21

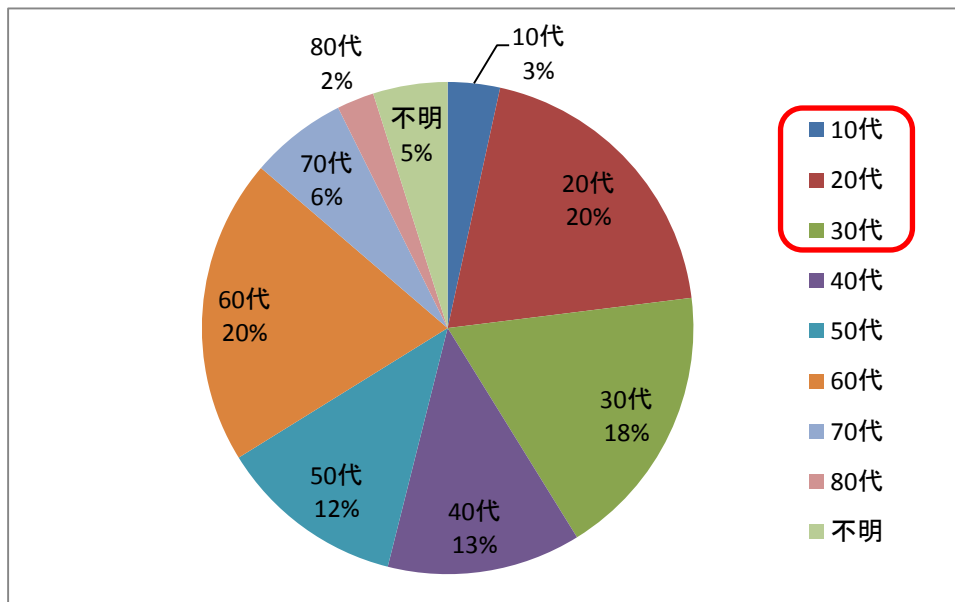


図 過去 10 年間の年齢層別遭難者の割合

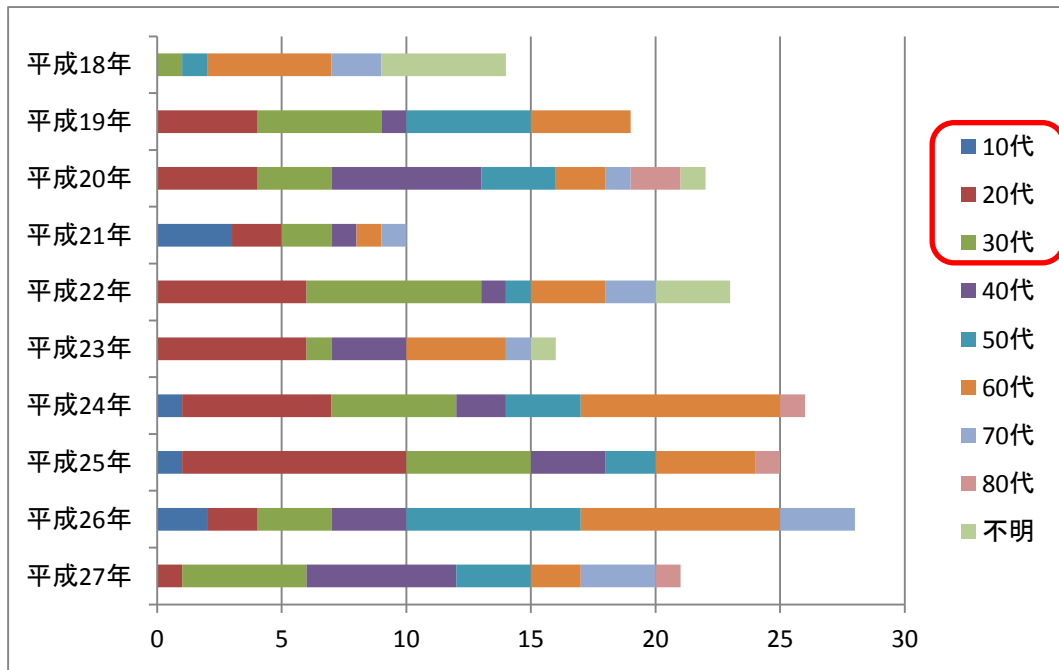


図 年齢層別遭難者数の推移

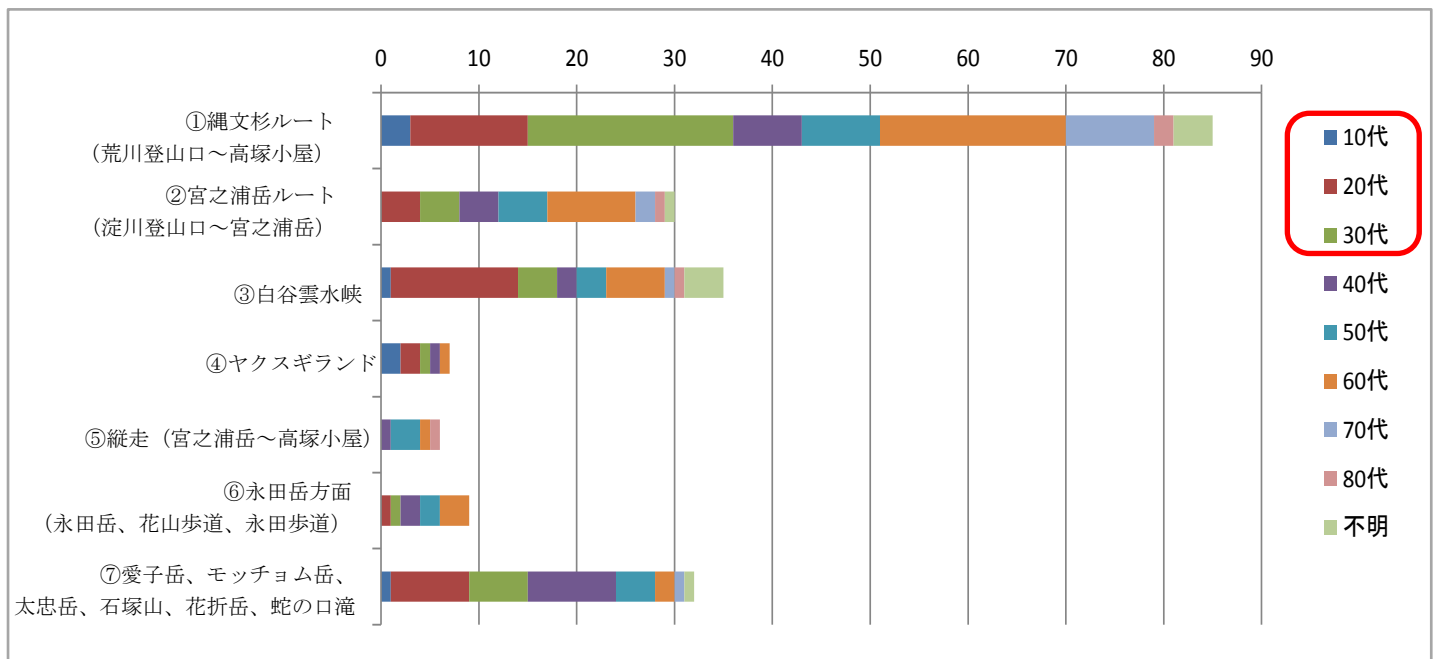


図 登山道ごとの年齢層別遭難者数

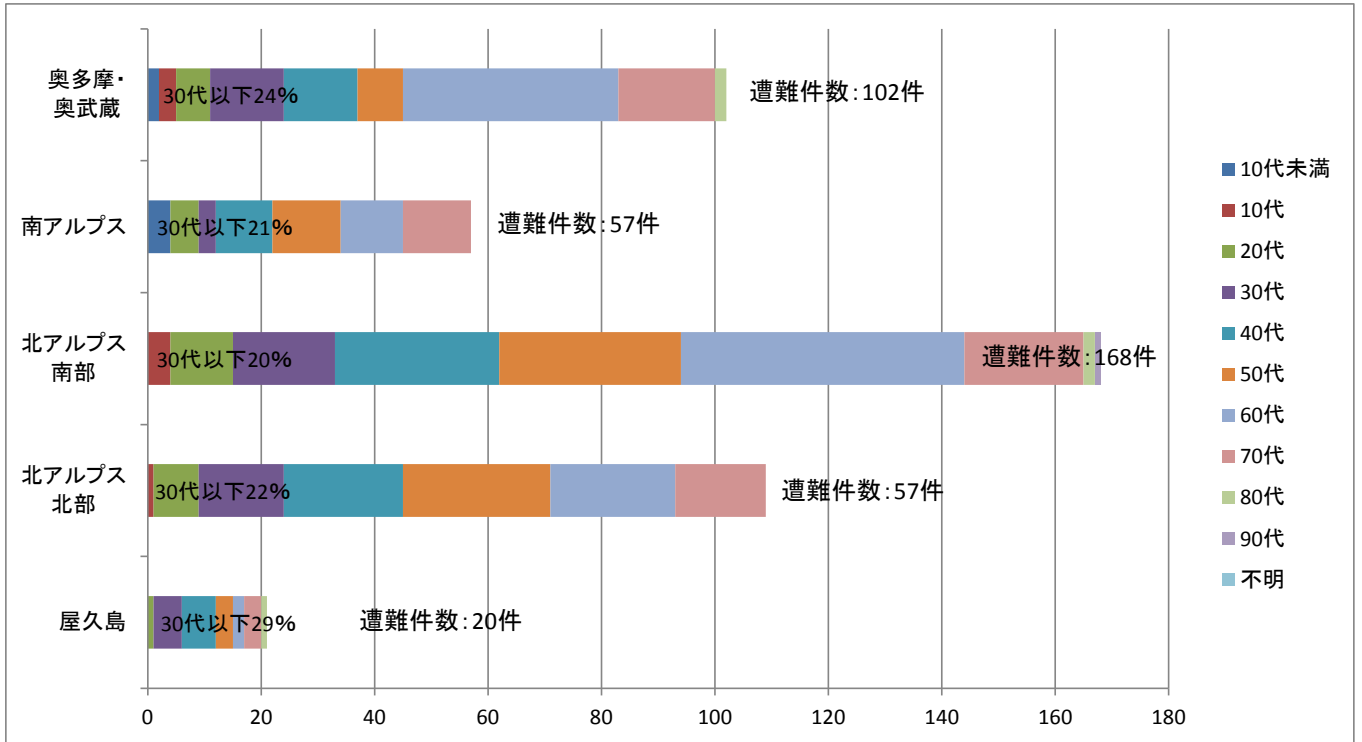


図 平成 27 年度における屋久島と他山域年齢層別遭難者数割合

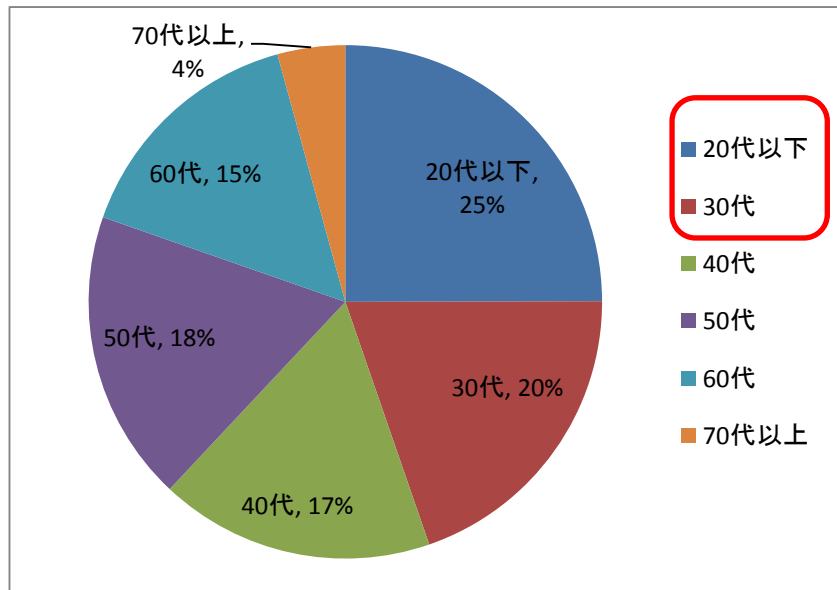


図 平成 27 年における屋久島主要ルート利用者の年代別割合

(3) 態様別

平成 18 年から過去 10 年間の屋久島全遭難者について、態様別にみると滑落・転倒が 33%と最も多く、次いで道迷いが 22%を占めている。平成 27 年度において、遭難者数の多い他の山域（北アルプス北部、北アルプス南部、南アルプス、奥多摩・奥武蔵）と比較してみても、滑落・転倒、道迷いは屋久島を含め全国的に遭難の大きな要因となっていることがわかる。

表 態様別遭難者数

	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
道迷い	3	4	3	3	2	4	3	5	6	0
滑落・転倒	4	5	8	0	1	3	11	4	8	12
負傷	5	1	1	1	1	0	0	0	1	2
病気	1	4	1	1	0	1	1	5	5	2
病気（胃腸）	0	1	0	1	2	1	0	1	0	0
疲労	1	4	8	4	3	6	6	9	8	2
他	0	0	1	0	14	1	5	1	0	3
合計	14	19	22	10	23	16	26	25	28	21

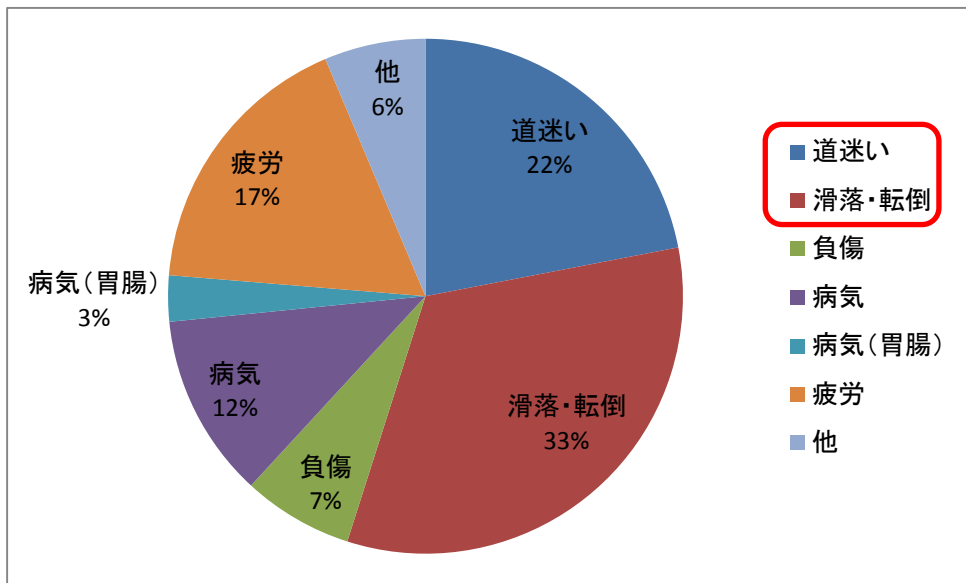


図 過去 10 年間の態様別遭難者の割合

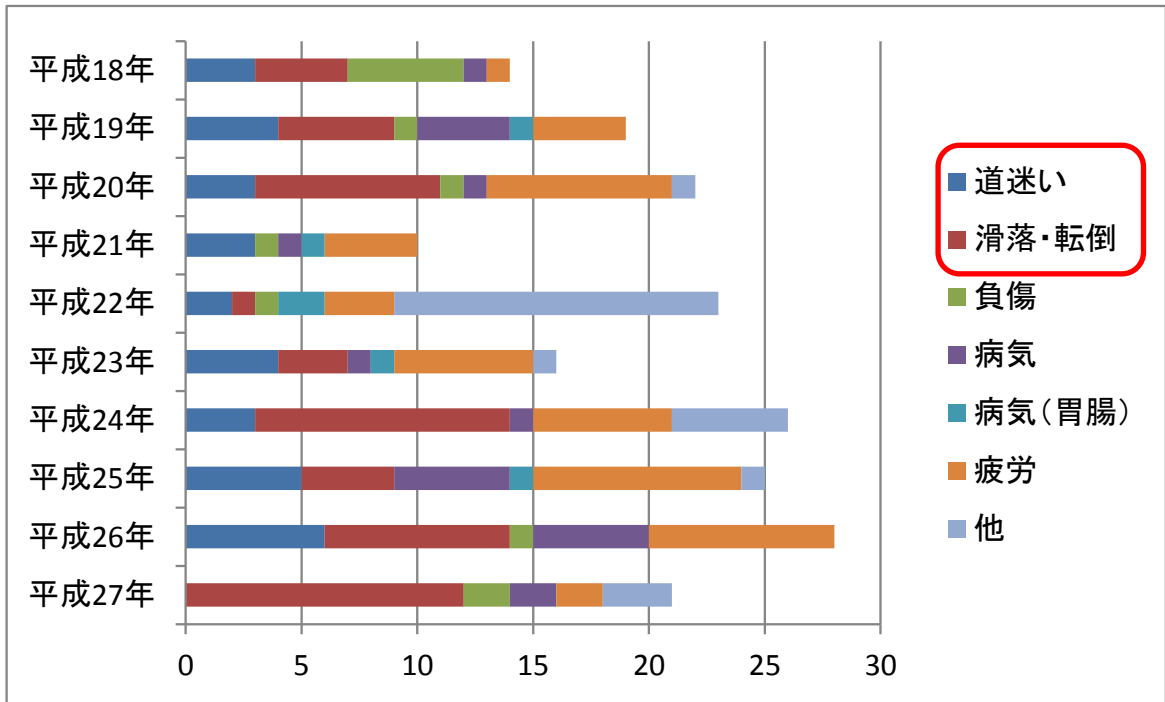


表 態様別遭難者数の推移

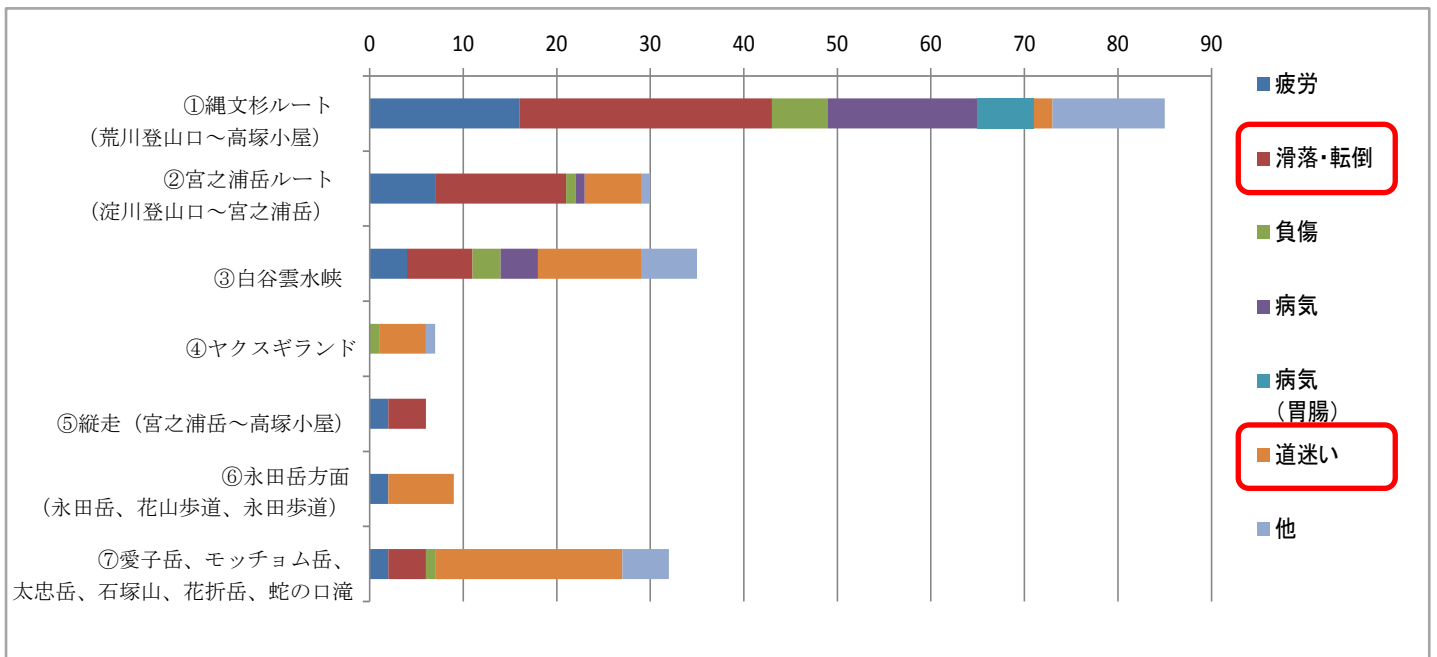


図 登山道ごとの態様別遭難者数

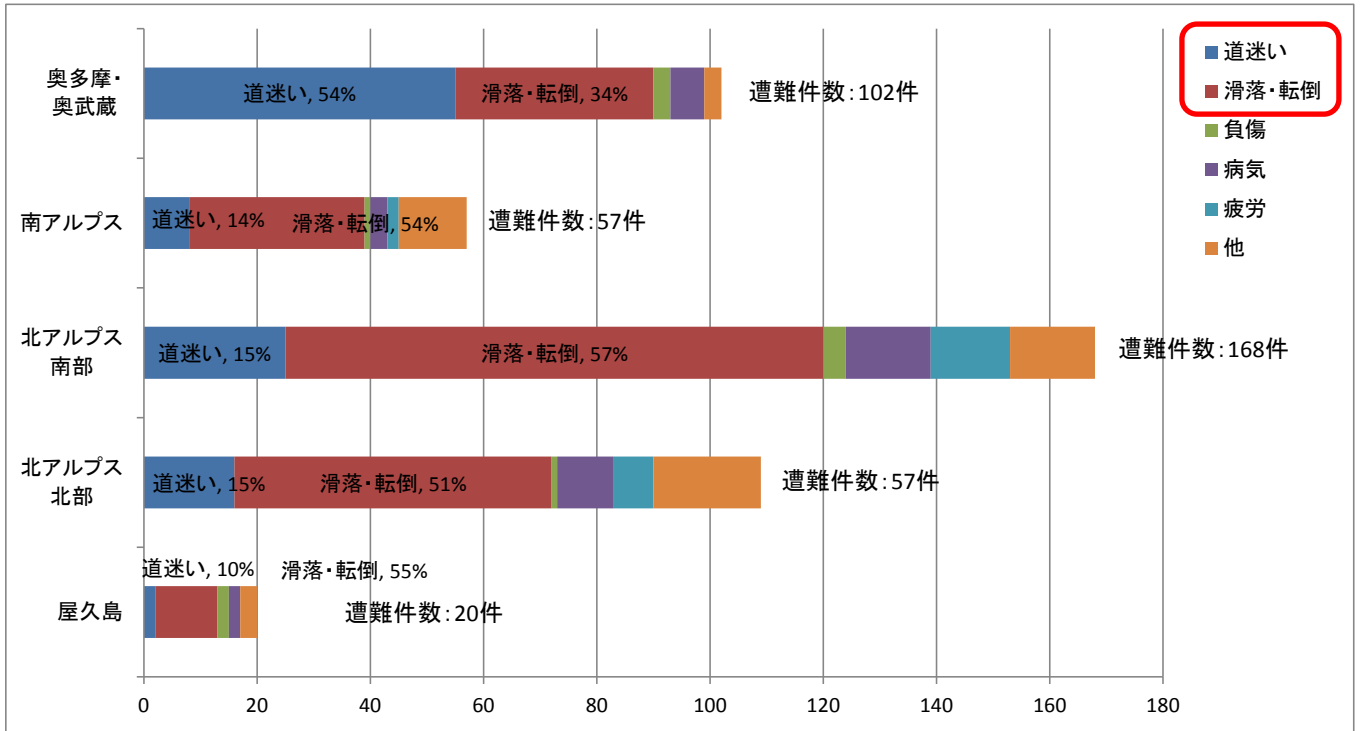


図 平成 27 年度における屋久島と他山域態様別遭難者数割合

(4) 主なルート別の入込数、遭難状況

① 縄文杉ルート（荒川登山口～高塚小屋）

縄文杉ルートへの入山者数は平成20年、21年の9万人台から、平成27年には6万人へと減少している。また、縄文杉ルートにおいて最も集中した日の入山者数も、平成21年の1,306人をピークに平成27年には3/4の986人に減少している。

縄文杉ルートを利用する年齢層については、平成27年度報告書アンケート結果から、幅広い層が利用しており、特に30代以下が5割いることがわかる。また、平成27年度報告書アンケートからは「登山経験がない」、「公園・低地等の散策・ハイキング」、「日帰りの登山」経験者が8割を占めている。これは縄文杉ルート（荒川登山道～縄文杉（往復））での30代以下の遭難者数が4割を超えていることにつながると考えられる。そして、60代の遭難者が多い理由は、大株歩道入口から縄文杉までの利用環境が厳しい箇所での疲労、滑落・転倒によることに起因すると思われる。

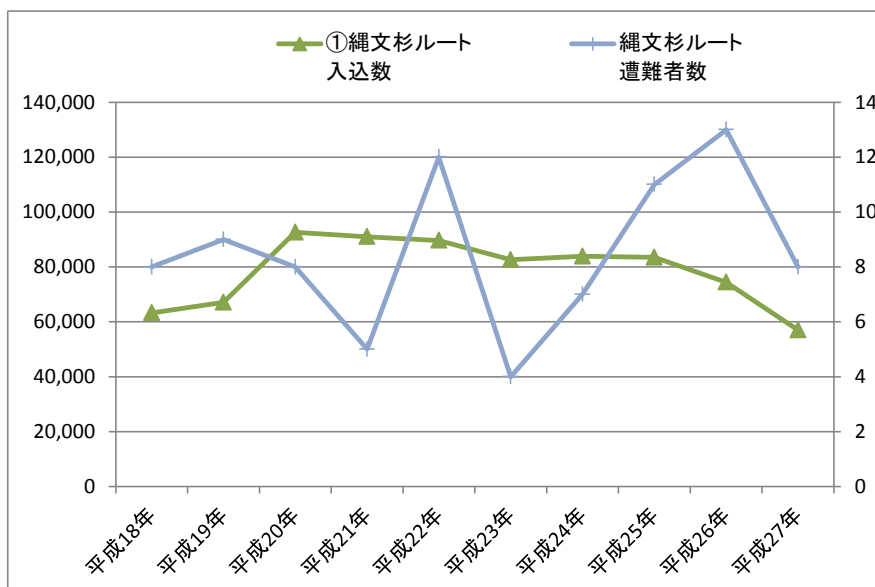


図 縄文杉ルートへの入込数と遭難者数の推移

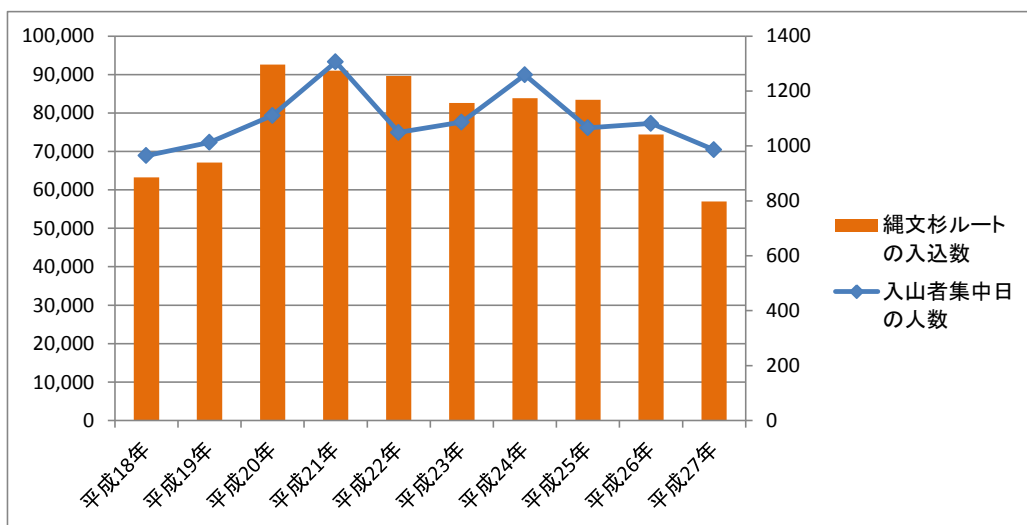


図 縄文杉ルートへの利用集中日の入込数

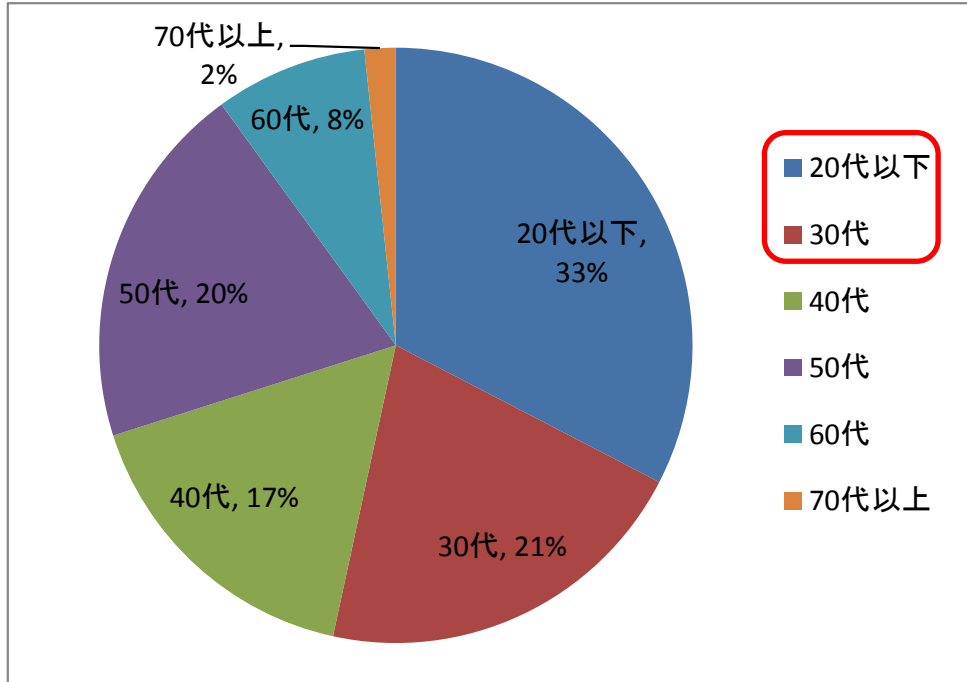


図 平成 27 年における縄文杉ルート利用者の年代別割合

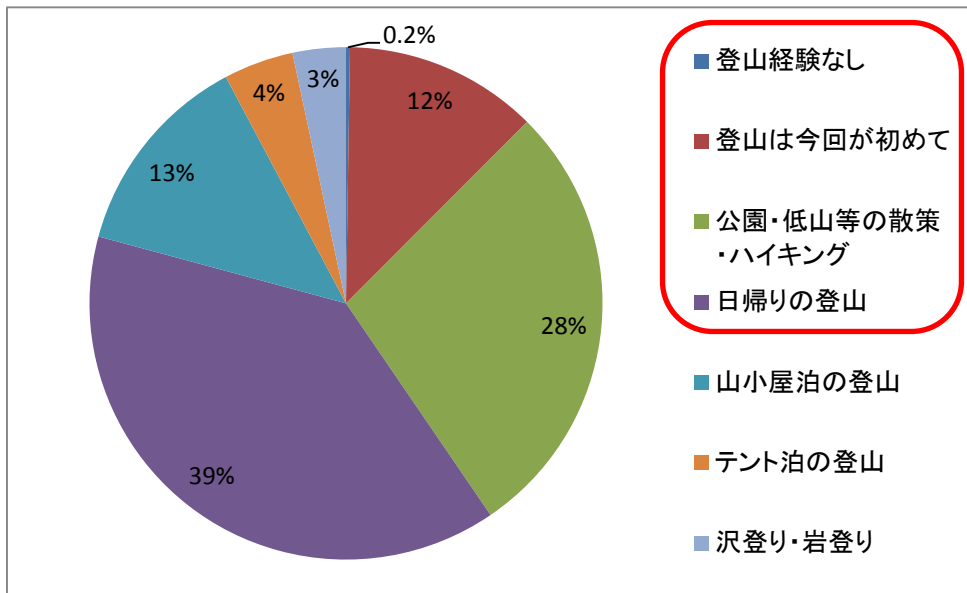
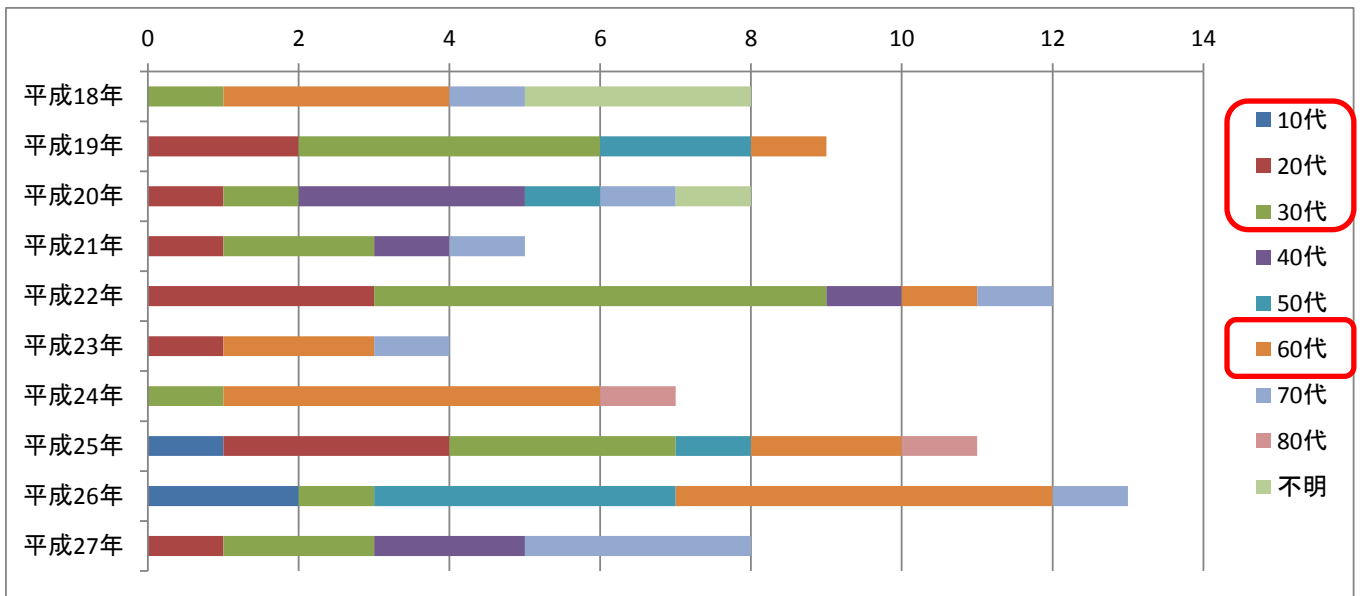


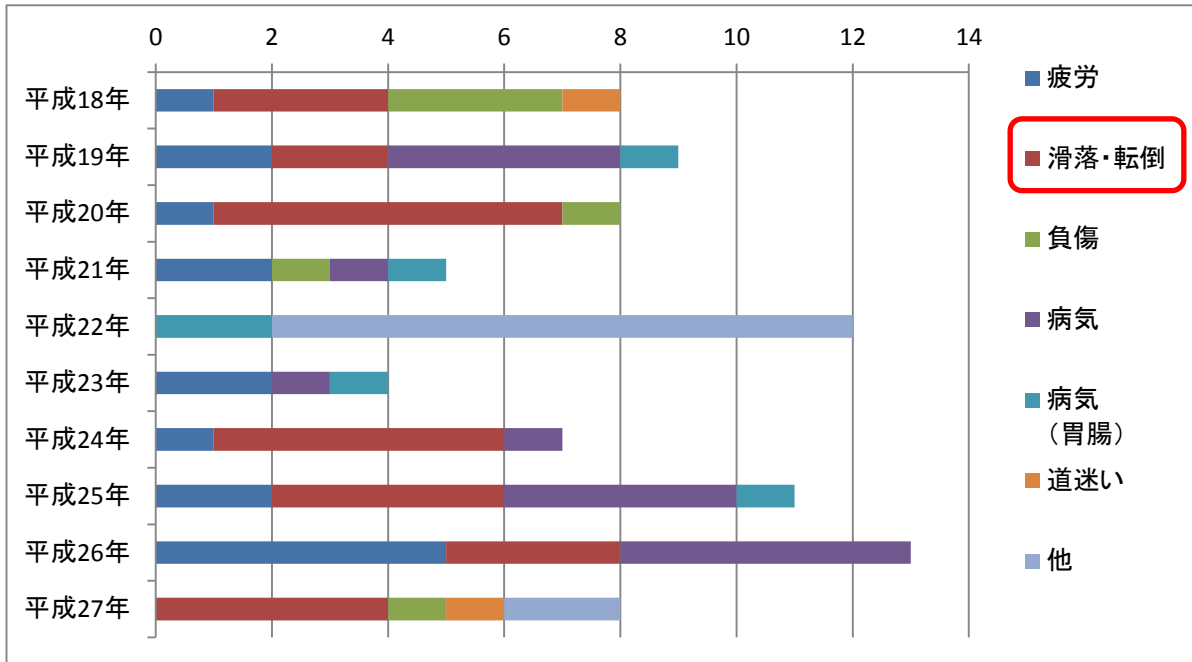
図 平成 27 年における縄文杉ルート利用者の登山経験割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
平成18年	0	0	1	0	0	3	1	0	3
平成19年	0	2	4	0	2	1	0	0	0
平成20年	0	1	1	3	1	0	1	0	1
平成21年	0	1	2	1	0	0	1	0	0
平成22年	0	3	6	1	0	1	1	0	0
平成23年	0	1	0	0	0	2	1	0	0
平成24年	0	0	1	0	0	5	0	1	0
平成25年	1	3	3	0	1	2	0	1	0
平成26年	2	0	1	0	4	5	1	0	0
平成27年	0	1	2	2	0	0	3	0	0
合計	3	12	21	7	8	19	9	2	4



図表 年齢層別遭難者数の推移(縄文杉ルート)

	疲労	滑落・転倒	負傷	病気	病気 (胃腸)	道迷い	他	うち 死亡 行方不明
平成18年	1	3	3	0	0	1	0	1
平成19年	2	2	0	4	1	0	0	0
平成20年	1	6	1	0	0	0	0	0
平成21年	2	0	1	1	1	0	0	0
平成22年	0	0	0	0	2	0	10	0
平成23年	2	0	0	1	1	0	0	0
平成24年	1	5	0	1	0	0	0	1
平成25年	2	4	0	4	1	0	0	2
平成26年	5	3	0	5	0	0	0	0
平成27年	0	4	1	0	0	1	2	0
合計	16	27	6	16	6	2	12	4



図表 態様別遭難者数の推移(縄文杉ルート)

②宮之浦岳ルート（淀川登山口～宮之浦岳）

宮之浦岳ルートへの入山者数は過去 10 年間では、年間 1 万人以上の利用がある。そして、宮之浦岳ルートにおいて最も利用集中した日の入山者数は、平成 19 年の 436 人をピークに平成 23 年には 2/3 の 282 人と減少し、顕著な入込ピークがみられなくなった。

宮之浦岳ルートを利用する年齢層については、平成 27 年度報告書アンケート結果より「登山経験がない」利用者はいなかったが、「公園・低地等の散策・ハイキング」、「日帰りの登山」経験者が 5 割を超えている。このことから、縄文杉ルート以上に利用環境の厳しい箇所での滑落・転倒が遭難の一因になっていると思われる。

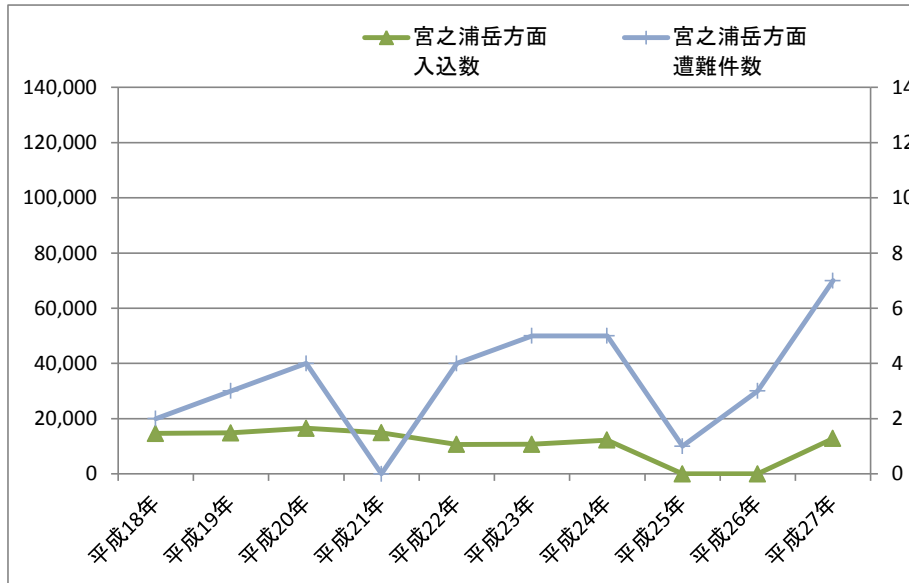


図 宮之浦岳ルートへの入込数と遭難者数の推移

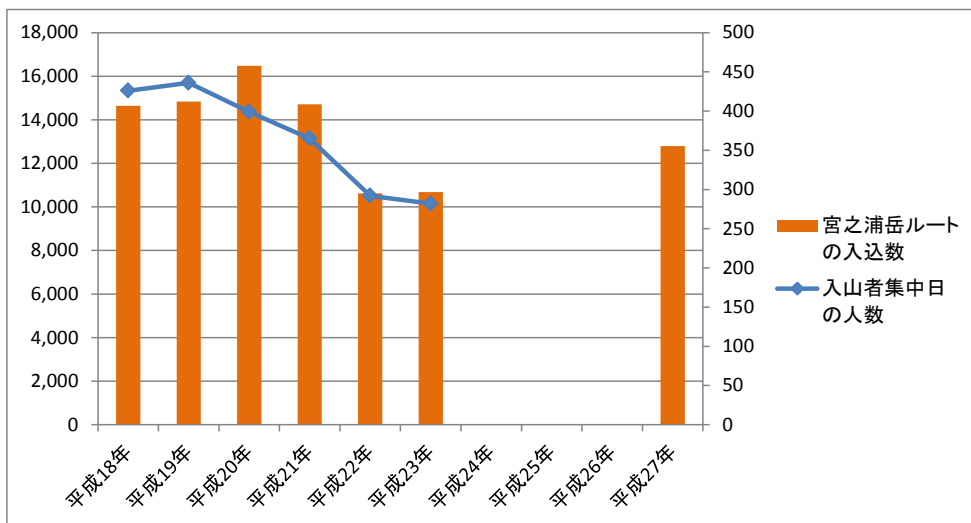


図 宮之浦岳ルートへの利用集中日の入込数

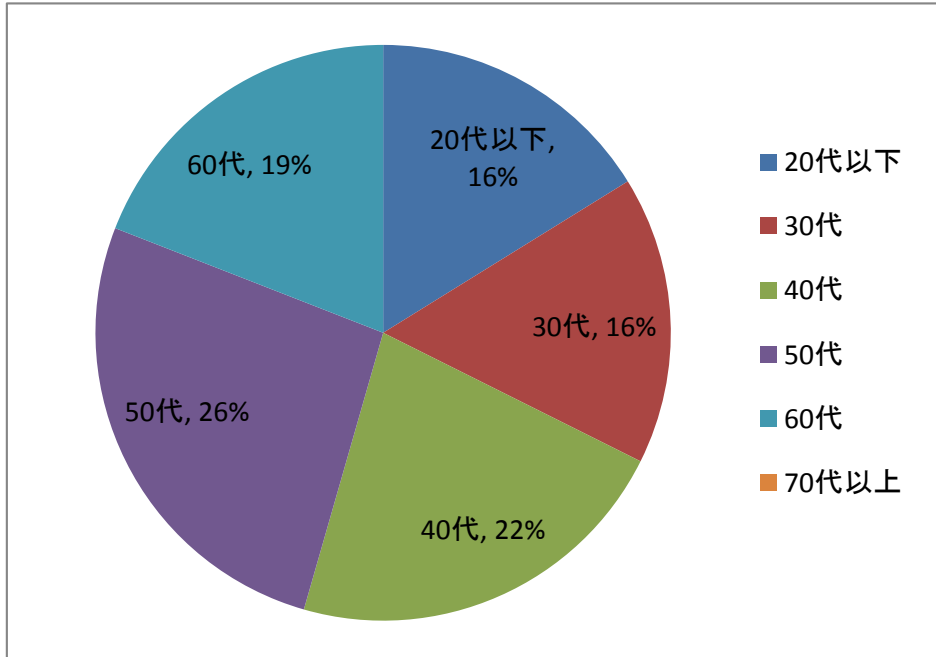


図 平成 27 年における宮之浦岳ルート利用者の年代別割合

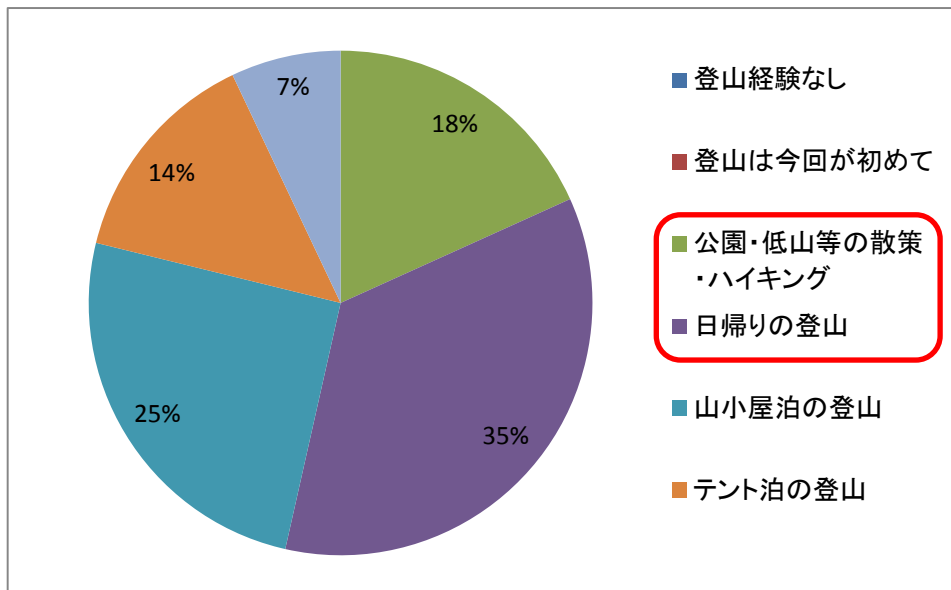
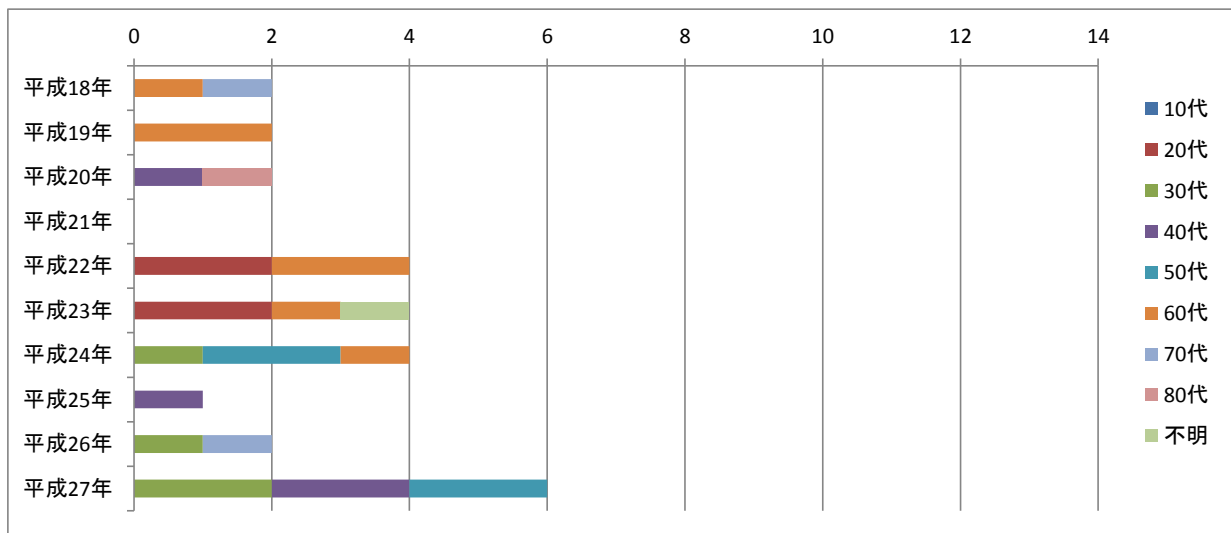


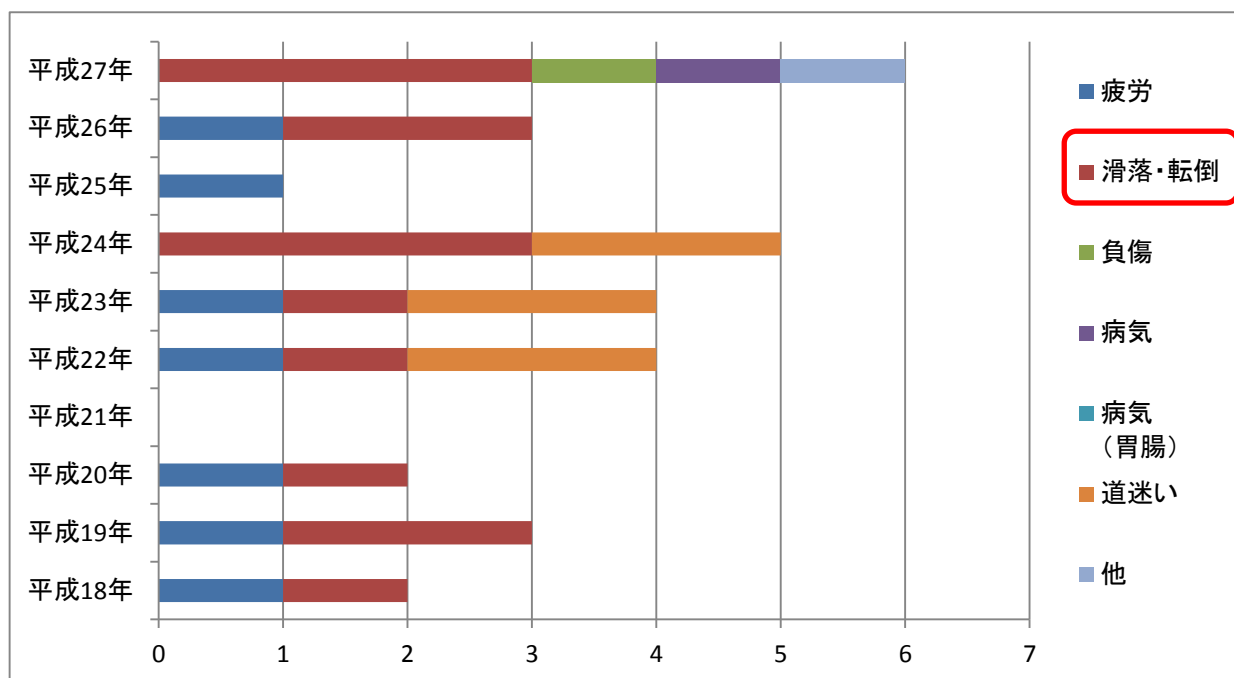
図 平成 27 年における宮之浦岳ルート利用者の登山経験割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
平成18年	0	0	0	0	0	1	1	0	0
平成19年	0	0	0	0	0	2	0	0	0
平成20年	0	0	0	1	0	0	0	1	0
平成21年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	0	2	0	0	0	2	0	0	0
平成23年	0	2	0	0	0	1	0	0	1
平成24年	0	0	1	0	2	1	0	0	0
平成25年	0	0	0	1	0	0	0	0	0
平成26年	0	0	1	0	0	0	1	0	0
平成27年	0	0	2	2	2	0	0	0	0
合計	0	4	4	4	4	7	2	1	1



図表 年齢層別遭難者数の推移(宮之浦岳ルート)

	疲労	滑落・転倒	負傷	病気	病気 (胃腸)	道迷い	他	うち 死亡 行方不明
平成18年	1	1	0	0	0	0	0	0
平成19年	1	2	0	0	0	0	0	0
平成20年	1	1	0	0	0	0	0	0
平成21年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	1	1	0	0	0	2	0	3
平成23年	1	1	0	0	0	2	0	1
平成24年	0	3	0	0	0	2	0	0
平成25年	1	0	0	0	0	0	0	0
平成26年	1	2	0	0	0	0	0	0
平成27年	0	3	1	1	0	0	1	0
合計	7	14	1	1	0	6	1	4



図表 態様別遭難者数の推移(宮之浦岳ルート)

③白谷雲水峡

白谷雲水峡は自然休養林として、自然探勝、登山、ハイキングなどを複合的に楽しむことができ、幅広い年齢層の利用を想定している。平成27年度報告書アンケート結果からも、幅広い年齢層が偏りなく利用しており、「登山経験がなし」、「登山は今回が初めて」、「公園・低山等の散策・ハイキング」程度の登山経験の浅い利用者が半数を占めていることがわかる。利用者数は、平成8年度統計開始時1万人前後から平成20年度には約11.8万人に達し、現在では9万人強の入り込みがある。外国人利用者数は増加傾向にあり、白谷雲水峡では平成23年1,680人(全体の2%)だった外国人利用者は平成27年には6,851人(全体の7%)と約4倍まで増加しており、平成26年から本年度まで道迷いや転倒による遭難が年に1件ある。

利用環境としては、管理棟からさつき吊橋まではハイキングには適しているが、そこから太鼓岩までは登山装備と体力が必要なり、増水時には徒渉困難な箇所もある。事前の情報収集なく、ハイキング程度を想定していた利用者が道を外れての道迷い、無理な徒渉を試みて流される等が遭難の一因になっていると考えられる。

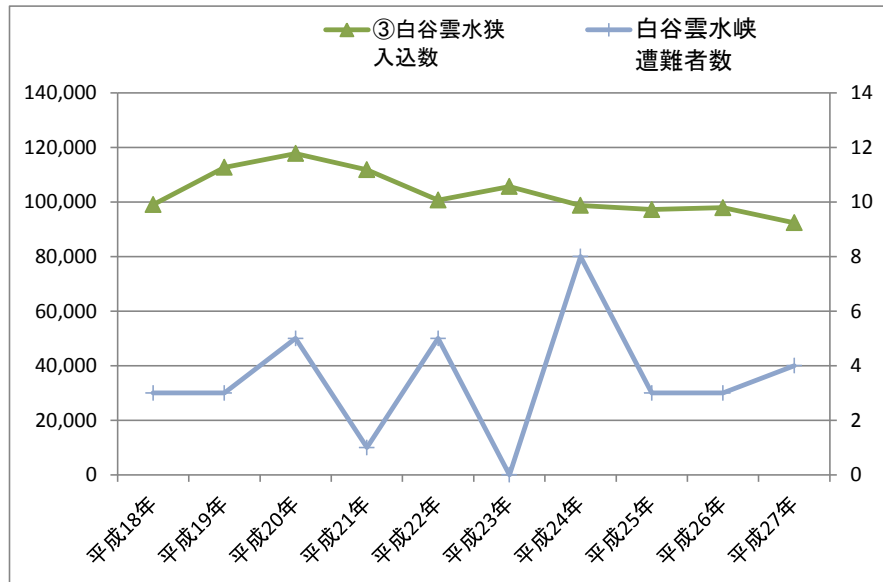


図 白谷雲水峡への入込数と遭難者数の推移

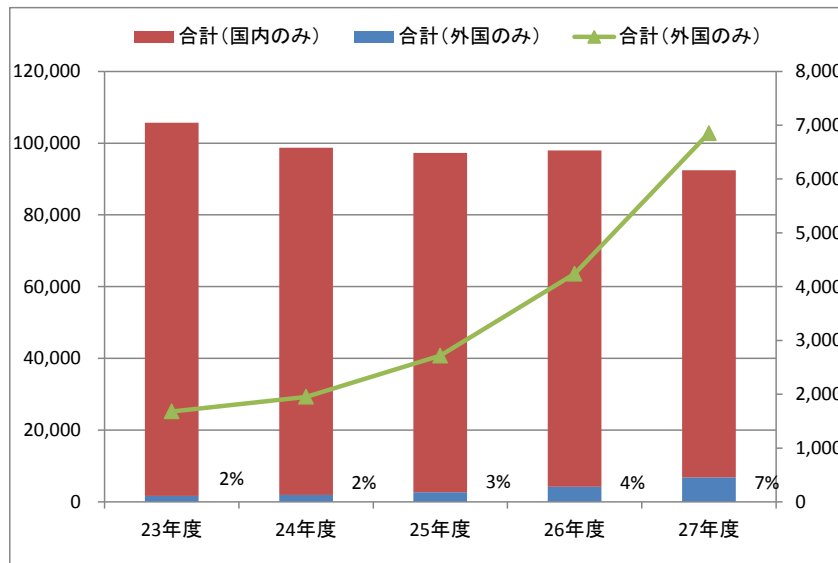


図 白谷雲水峡の国内、国外利用者数推移

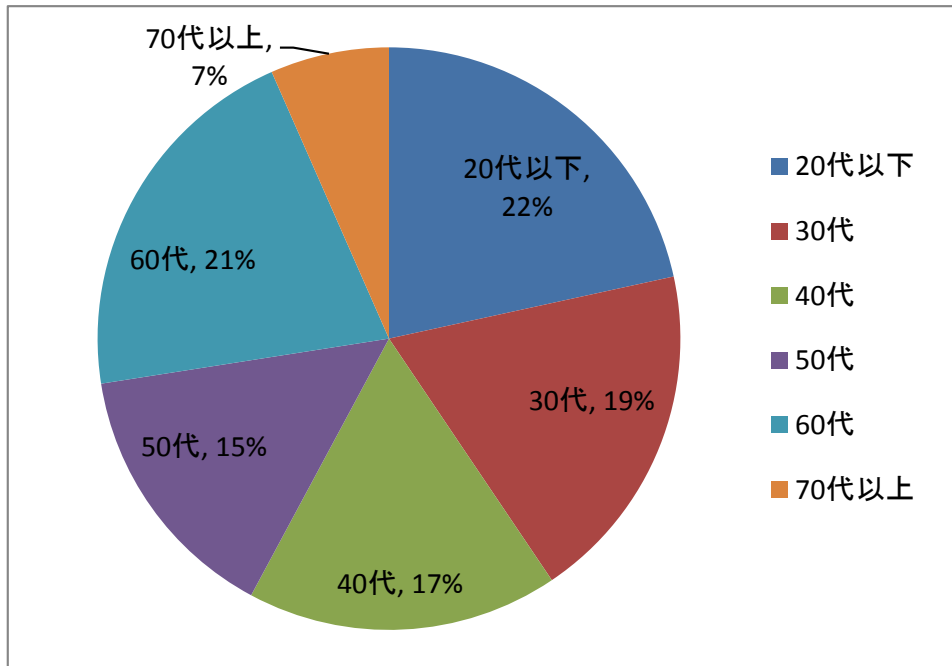


図 平成 27 年における白谷雲水峡利用者の年代別割合

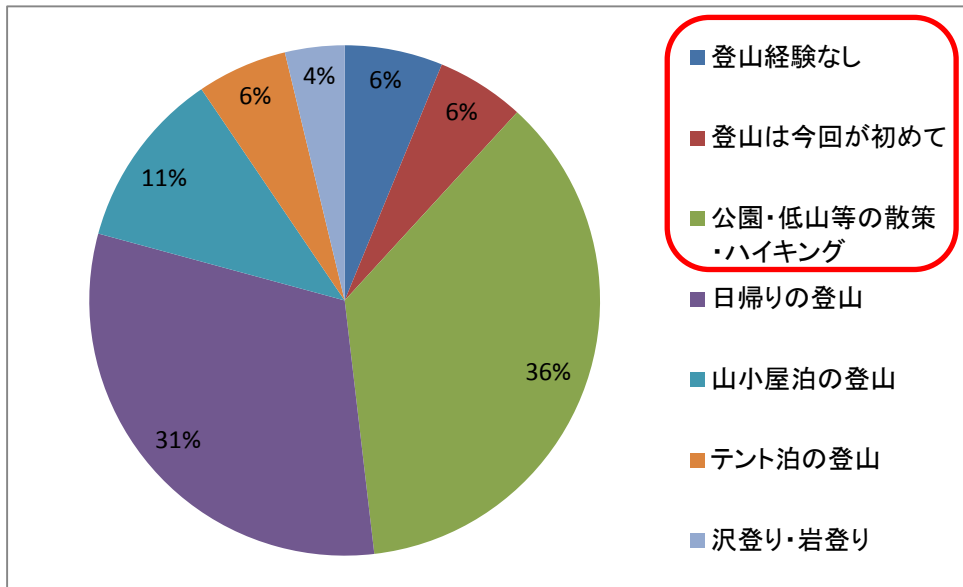
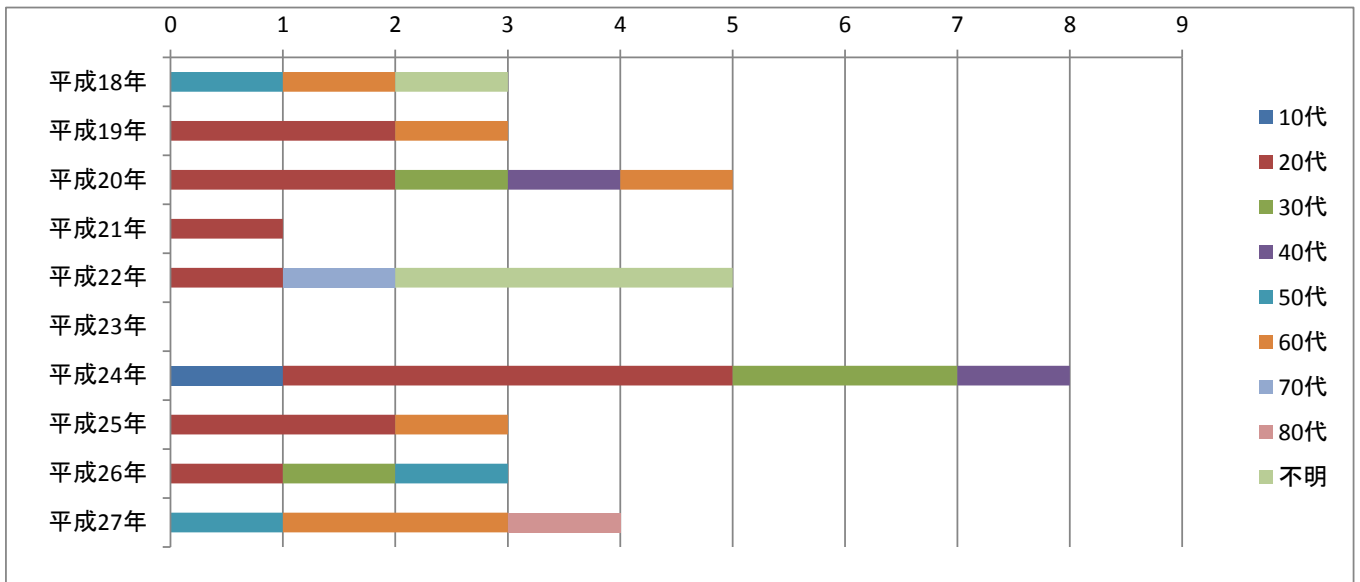


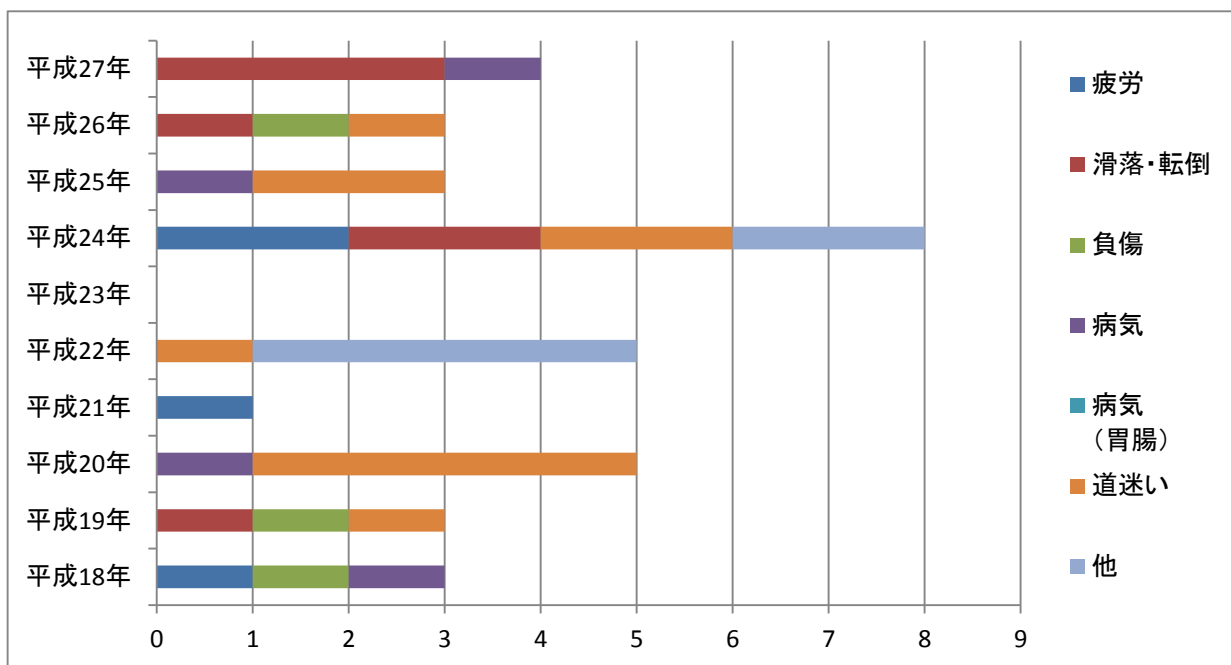
図 平成 27 年度における白谷雲水峡利用者の登山経験割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
平成18年	0	0	0	0	1	1	0	0	1
平成19年	0	2	0	0	0	1	0	0	0
平成20年	0	2	1	1	0	1	0	0	0
平成21年	0	1	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	0	1	0	0	0	0	1	0	3
平成23年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成24年	1	4	2	1	0	0	0	0	0
平成25年	0	2	0	0	0	1	0	0	0
平成26年	0	1	1	0	1	0	0	0	0
平成27年	0	0	0	0	1	2	0	1	0
合計	1	13	4	2	3	6	1	1	4



図表 年齢層別遭難者数の推移(白谷雲水峡)

	疲労	滑落・転倒	負傷	病気	病気 (胃腸)	道迷い	他	うち 死亡 行方不明
平成18年	1	0	1	1	0	0	0	1
平成19年	0	1	1	0	0	1	0	0
平成20年	0	0	0	1	0	4	0	0
平成21年	1	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	0	0	0	0	0	1	4	0
平成23年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成24年	2	2	0	0	0	2	2	0
平成25年	0	0	0	1	0	2	0	0
平成26年	0	1	1	0	0	1	0	1
平成27年	0	3	0	1	0	0	0	1
合計	4	7	3	4	0	11	6	3



図表 態様別遭難者数の推移 (白谷雲水峡)

④ヤクスギランド

ヤクスギランドも自然休養林であり、興味や体力に合わせて好みの4コースが選べて、登山をしなくてもヤクスギを觀賞できる唯一の森である。利用者数は、統計開始時平成5年度約5万人から平成15年度には11.6万人まで増加、その後減少傾向となり、現在は約6万人の入込みがある。外国人利用者は増加傾向にあり、平成23年1,119人(全体の1%)が平成27年には3,006人(全体の5%)と約2.7倍に増加している。平成25年から本年度までにおける、外国人遭難者の把握はされていない。

平成27年度報告書アンケート調査結果から、60代以降が4割、「登山経験がなし」、「登山は今回が初めて」、「公園・低山等の散策・ハイキング」程度の登山経験の浅い利用者が半数を占めている。毎年1人程度は、道迷いから遭難している。

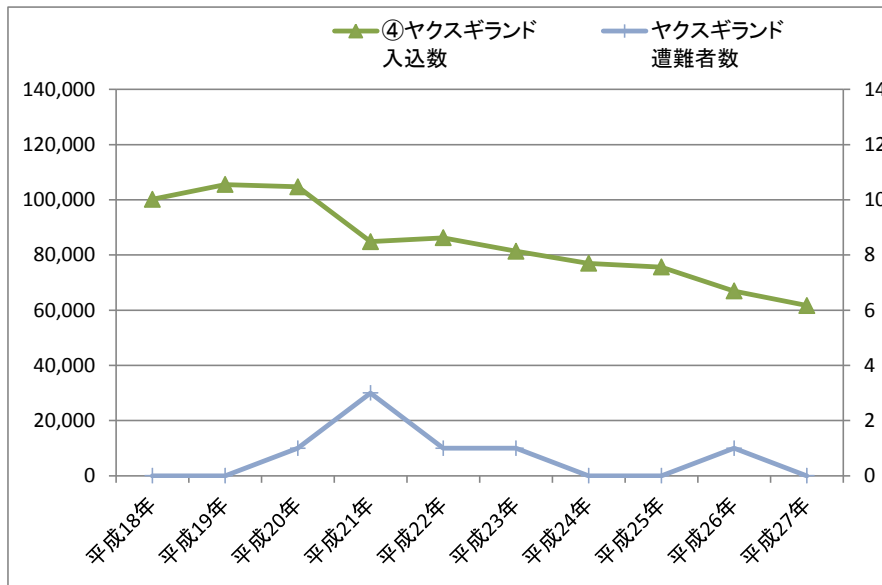


図 ヤクスギランドへの入込数と遭難者数の推移

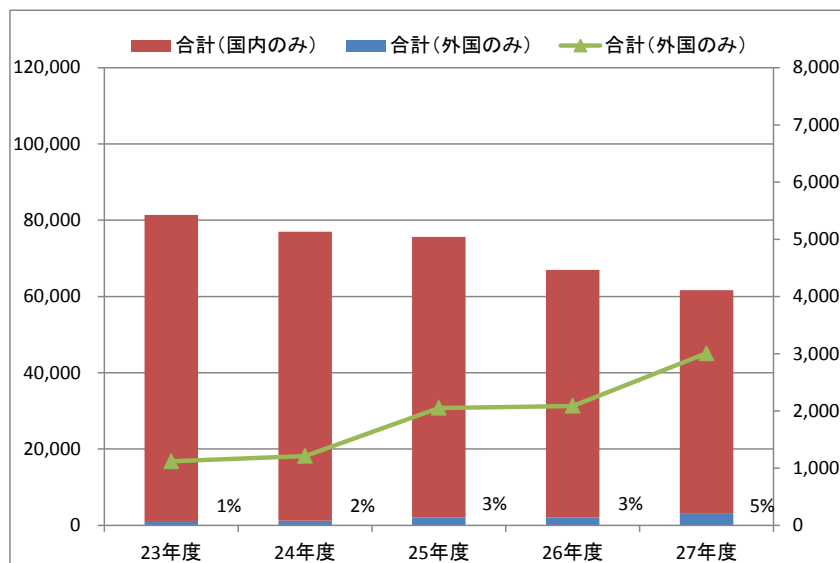


図 ヤクスギランドの国内、国外利用者数推移

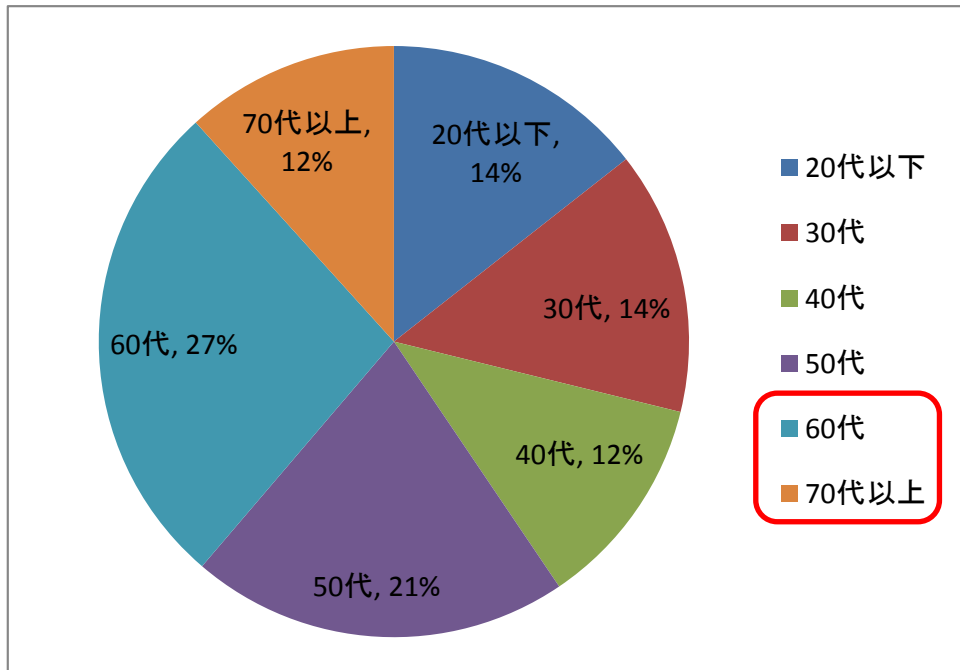


図 平成 27 年におけるヤクスギランド利用者の年代別割合

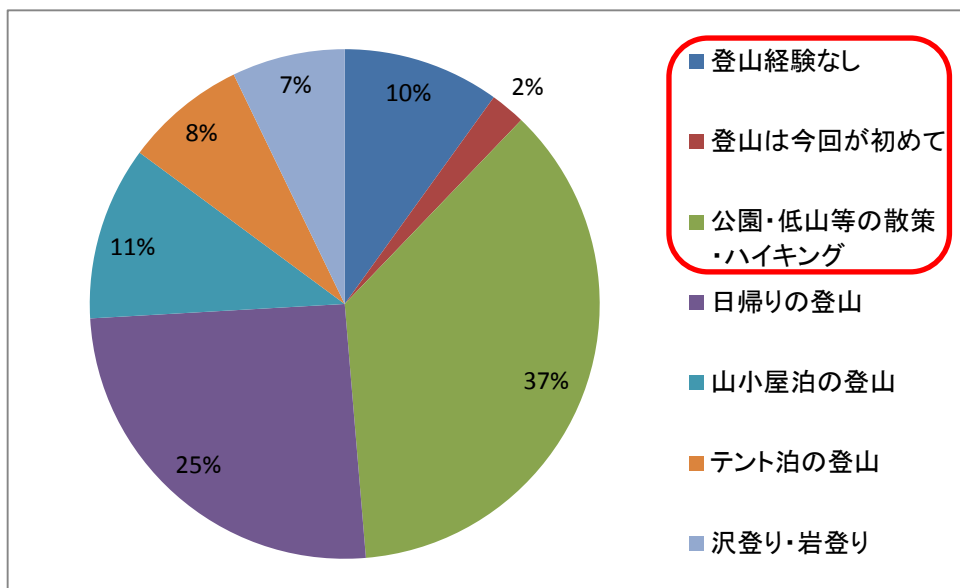
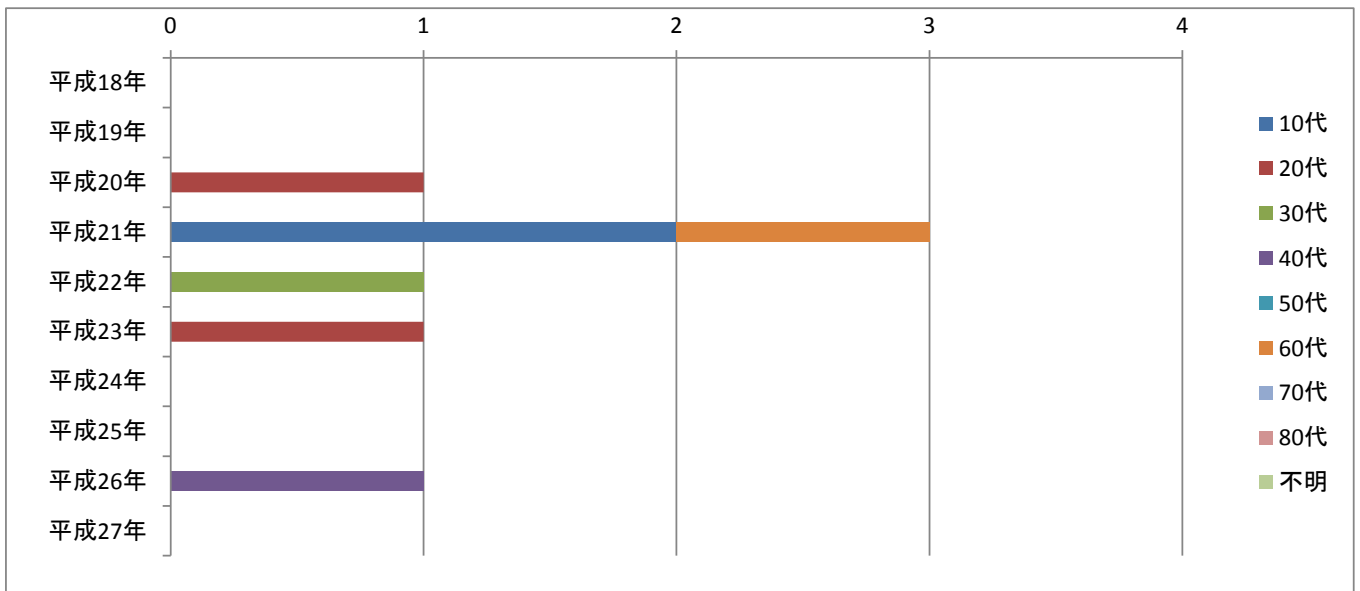


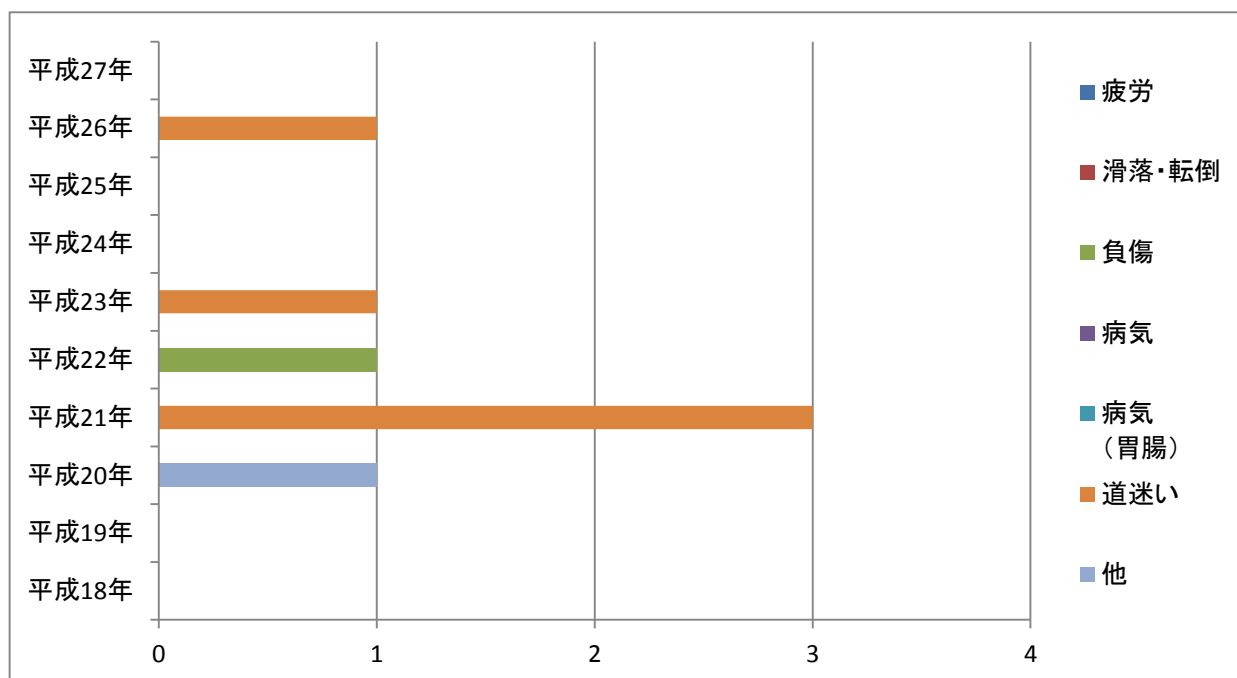
図 平成 27 年度におけるヤクスギランド利用者の登山経験割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
平成18年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成19年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成20年	0	1	0	0	0	0	0	0	0
平成21年	2	0	0	0	0	1	0	0	0
平成22年	0	0	1	0	0	0	0	0	0
平成23年	0	1	0	0	0	0	0	0	0
平成24年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成25年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成26年	0	0	0	1	0	0	0	0	0
平成27年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	2	2	1	1	0	1	0	0	0



図表 年齢層別遭難者数の推移(ヤクスギランド)

	疲労	滑落・転倒	負傷	病気	病気 (胃腸)	道迷い	他	うち 死亡 行方不明
平成18年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成19年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成20年	0	0	0	0	0	0	1	0
平成21年	0	0	0	0	0	3	0	0
平成22年	0	0	1	0	0	0	0	0
平成23年	0	0	0	0	0	1	0	0
平成24年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成25年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成26年	0	0	0	0	0	1	0	0
平成27年	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	1	0	0	5	1	0

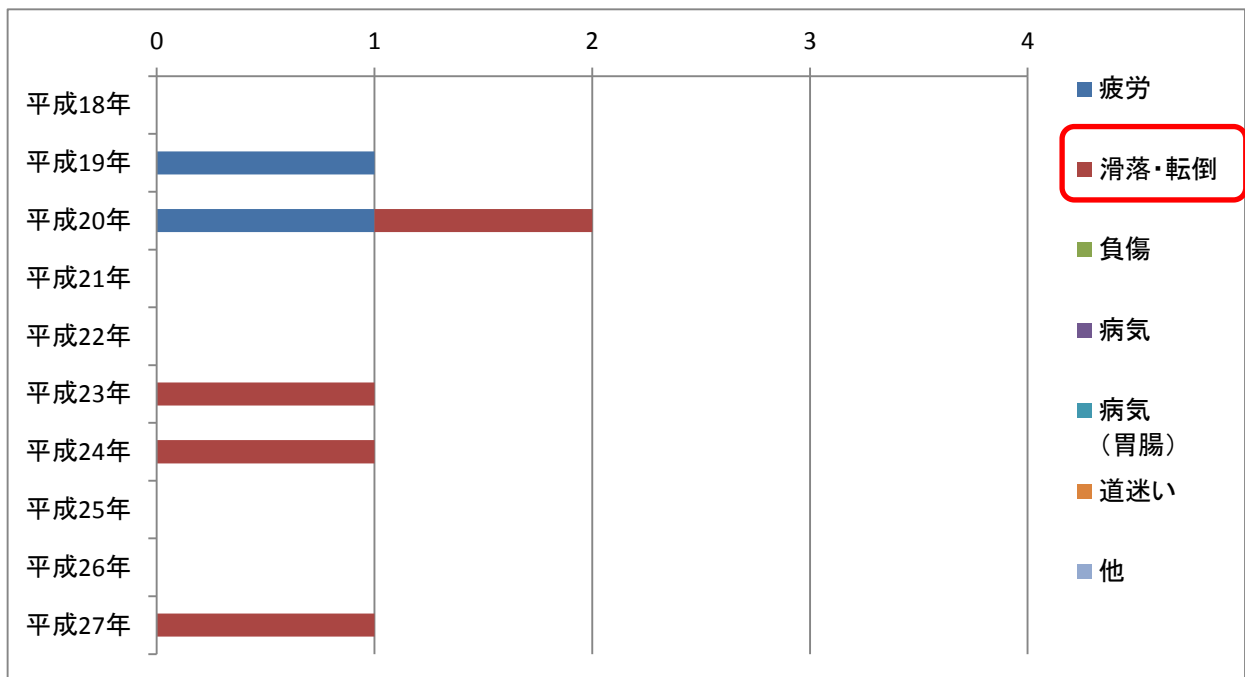


図表 態様別遭難者数の推移(ヤクスギランド)

⑤縦走（宮之浦岳～高塚小屋）

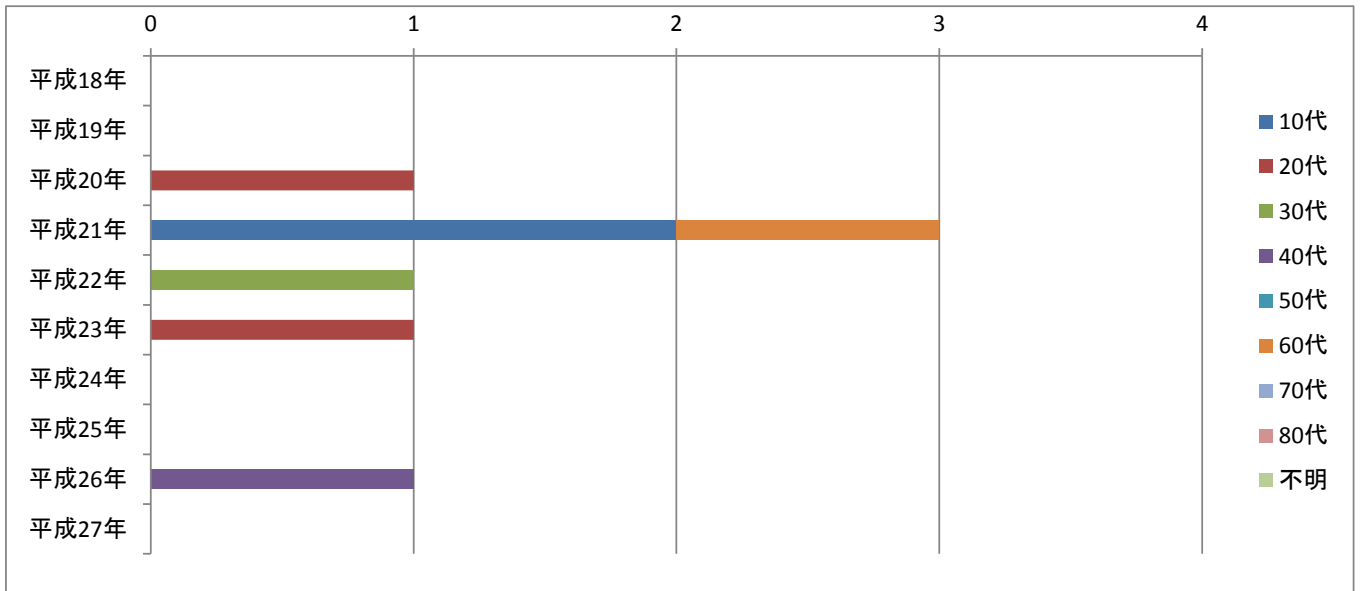
縦走路上の山小屋で 1 泊する行程になるが、ガイドを伴えば登山初心者でも縦走できてしまう。疲労、滑落・転倒により遭難が発生するが、多くはない。

	疲労	滑落・転倒	負傷	病気	病気 (胃腸)	道迷い	他	うち 死亡 行方不明
平成18年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成19年	1	0	0	0	0	0	0	1
平成20年	1	1	0	0	0	0	0	0
平成21年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成23年	0	1	0	0	0	0	0	0
平成24年	0	1	0	0	0	0	0	0
平成25年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成26年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成27年	0	1	0	0	0	0	0	0
合計	2	4	0	0	0	0	0	1



図表 年齢層別遭難者数の推移(縦走(宮之浦岳～高塚小屋))

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
平成18年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成19年	0	0	0	0	1	0	0	0	0
平成20年	0	0	0	0	1	0	0	1	0
平成21年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成23年	0	0	0	0	0	1	0	0	0
平成24年	0	0	0	0	1	0	0	0	0
平成25年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成26年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成27年	0	0	0	1	0	0	0	0	0
合計	0	0	0	1	3	1	0	1	0

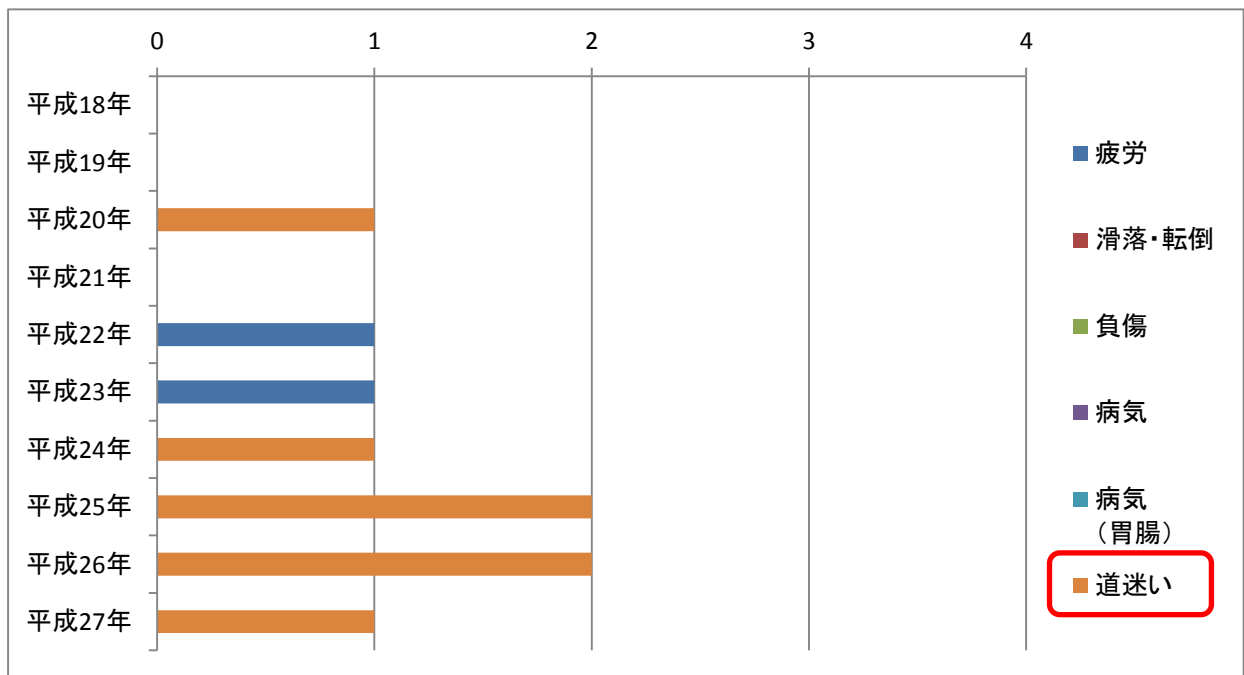


図表 態様別遭難者数の推移(縦走(宮之浦岳～高塚小屋))

⑥永田岳方面（永田岳、花山歩道、永田歩道）

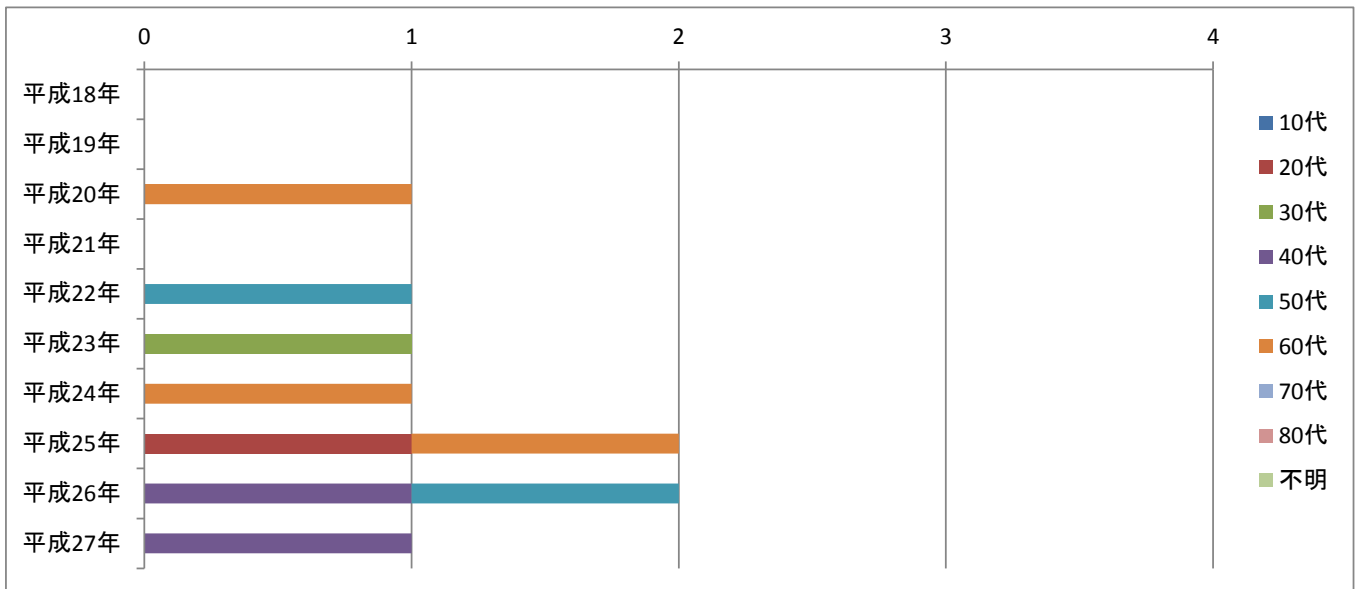
永田歩道または花山歩道から永田岳に通じるルートは、利用者が少なく、木道等の整備はされていないがピンクテープを追いながら登山道を進む事ができる。鹿之沢小屋から永田岳までの登山道は荒廃が大きく進み、注意が必要である。利用者が少ない事に伴って、遭難者も少ないが、態様別にみると道迷いが遭難につながっていることがわかる。

	疲労	滑落・転倒	負傷	病気	病気 (胃腸)	道迷い	他	うち 死亡 行方不明
平成18年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成19年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成20年	0	0	0	0	0	1	0	0
平成21年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	1	0	0	0	0	0	0	0
平成23年	1	0	0	0	0	0	0	0
平成24年	0	0	0	0	0	1	0	0
平成25年	0	0	0	0	0	2	0	0
平成26年	0	0	0	0	0	2	0	0
平成27年	0	0	0	0	0	1	0	0
合計	2	0	0	0	0	7	0	0



図表 態様別遭難者数の推移
永田岳方面(永田岳、花山歩道、永田歩道)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
平成18年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成19年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成20年	0	0	0	0	0	1	0	0	0
平成21年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	0	0	0	0	1	0	0	0	0
平成23年	0	0	1	0	0	0	0	0	0
平成24年	0	0	0	0	0	1	0	0	0
平成25年	0	1	0	0	0	1	0	0	0
平成26年	0	0	0	1	1	0	0	0	0
平成27年	0	0	0	1	0	0	0	0	0
合計	0	1	1	2	2	3	0	0	0



図表 年齢層別遭難者数の推移
永田岳方面(永田岳、花山歩道、永田歩道)

⑦その他のルート（愛子岳、モッチョム岳、蛇の口滝、太忠岳・石塚山・花折岳ほか）

愛子岳、モッチョム岳、蛇の口滝（蛇の口ハイキングコース）、太忠岳・石塚山・花折岳ほかルートは登山初心者には困難なルートである。ピンクテープを道しるべに歩く事はできるが、道迷いしやすく、遭難の要因となっている。

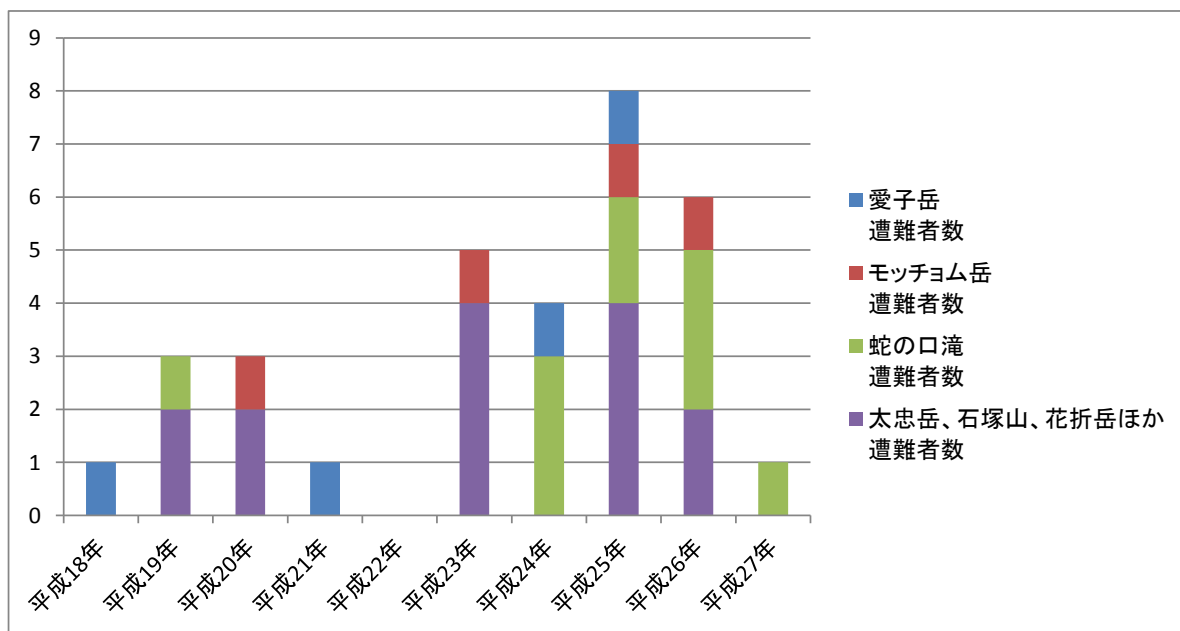
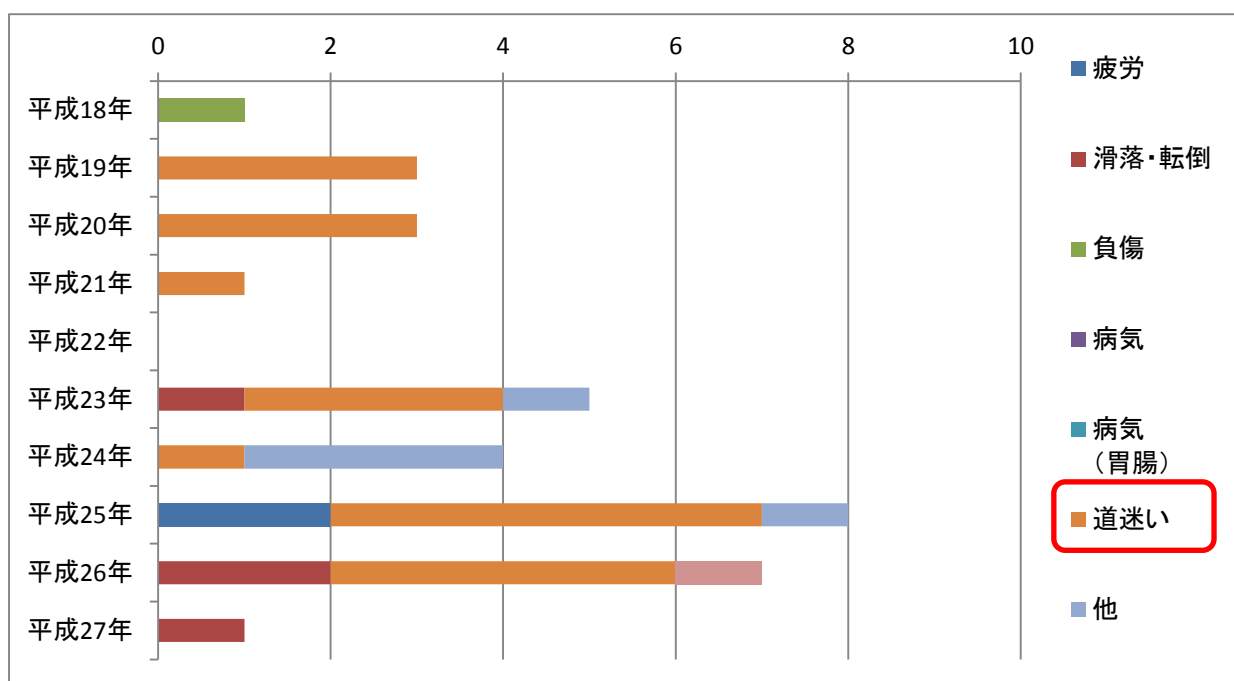


図 その他のルート(愛子岳、モッチョム岳、蛇の口滝、太忠岳・石塚山・花折岳ほか)の遭難者数推移

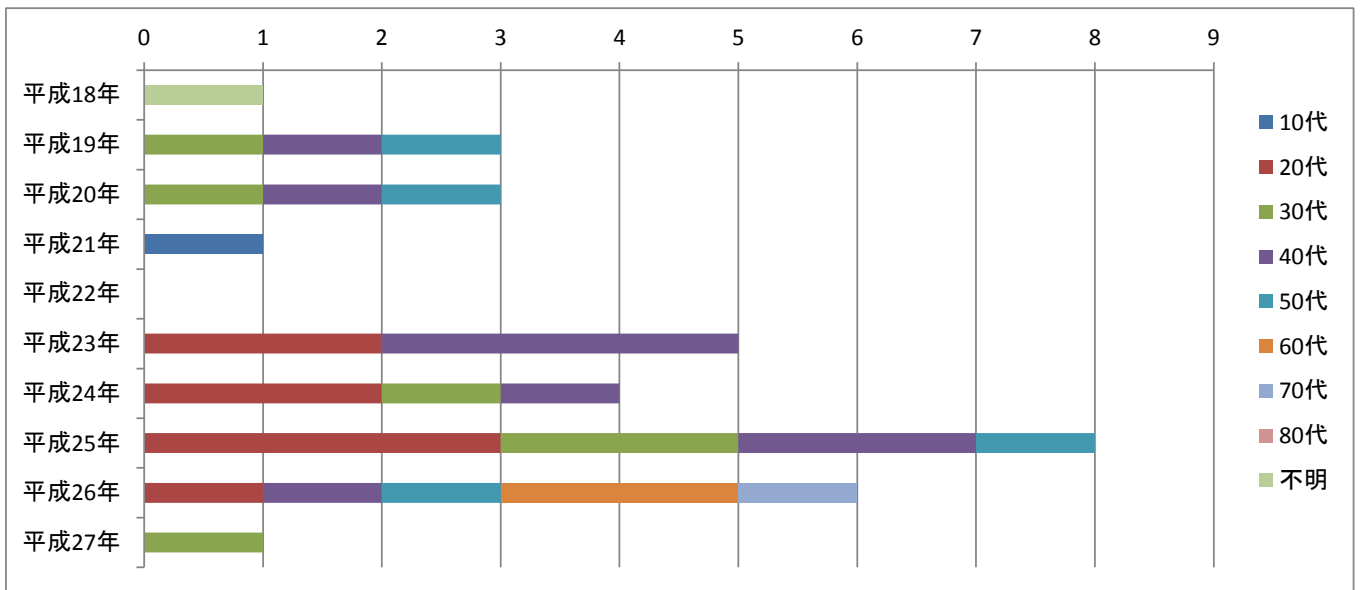
	疲労	滑落・転倒	負傷	病気	病気 (胃腸)	道迷い	他	うち 死亡 行方不明
平成18年	0	0	1	0	0	0	0	0
平成19年	0	0	0	0	0	3	0	0
平成20年	0	0	0	0	0	3	0	0
平成21年	0	0	0	0	0	1	0	0
平成22年	0	0	0	0	0	0	0	0
平成23年	0	1	0	0	0	3	1	0
平成24年	0	0	0	0	0	1	3	0
平成25年	2	0	0	0	0	5	1	0
平成26年	0	2	0	0	0	4	0	1
平成27年	0	1	0	0	0	0	0	0
合計	2	4	1	0	0	20	5	1



図表 態様別遭難者数の推移

その他のルート(愛子岳、モッチョム岳、太忠岳、石塚山、花折岳、蛇の口滝)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
平成18年	0	0	0	0	0	0	0	0	1
平成19年	0	0	1	1	1	0	0	0	0
平成20年	0	0	1	1	1	0	0	0	0
平成21年	1	0	0	0	0	0	0	0	0
平成22年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平成23年	0	2	0	3	0	0	0	0	0
平成24年	0	2	1	1	0	0	0	0	0
平成25年	0	3	2	2	1	0	0	0	0
平成26年	0	1	0	1	1	2	1	0	0
平成27年	0	0	1	0	0	0	0	0	0
合計	1	8	6	9	4	2	1	0	1



図表 年齢層別遭難者数の推移
 その他のルート(愛子岳、モッチョム岳、太忠岳、石塚山、花折岳、蛇の口滝)

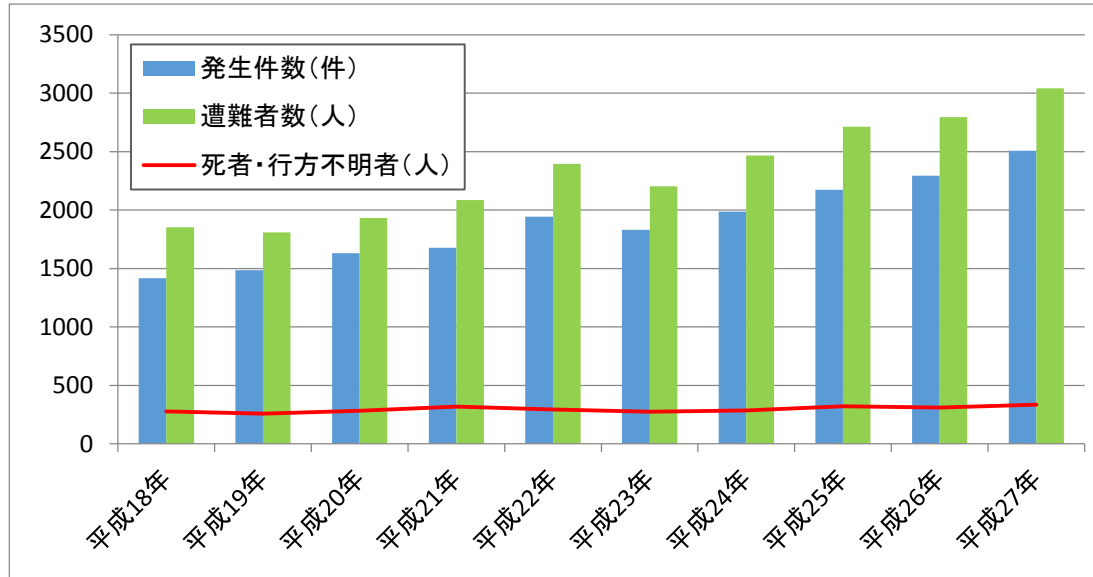
2. 都道府県別の遭難概要

(1) 全国の発生状況

平成 27 年中の山岳遭難の発生件数、遭難者、死者・行方不明者は統計の残る昭和 36 年以降で最も高い数値となった。

また、平成 18 年から過去 10 年間の山岳遭難状況をみると、平成 18 年と比較して発生件数 1.7 倍、遭難者 1.6 倍、死者・行方不明者 1.2 倍と増加傾向にある。ちなみに、平成 18 年は豪雪の年で大規模な遭難が続けざまに発生し、翌 19 年はその影響が表れたものと考えられている。平成 23 年に遭難件数が減少したのは、東日本大震災の影響からであった。

	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	
											構成比
発生件数	1,417	1,484	1,631	1,676	1,942	1,830	1,988	2,172	2,293	2,508	-
遭難者数	1,853	1,808	1,933	2,085	2,396	2,204	2,465	2,713	2,794	3,043	100.0%
死者・行方不明者	278	259	281	317	294	275	284	320	311	335	11.0%
	死者	251	233	253	269	244	249	278	272	298	9.8%
	行方不明者	27	26	28	48	32	31	35	42	39	1.2%
負傷者	648	666	698	670	832	819	927	1,003	1,041	1,151	37.8%
無事救出者	927	883	954	1,098	1,270	1,110	1,254	1,390	1,442	1,557	51.2%



図表 山岳遭難発生状況の推移

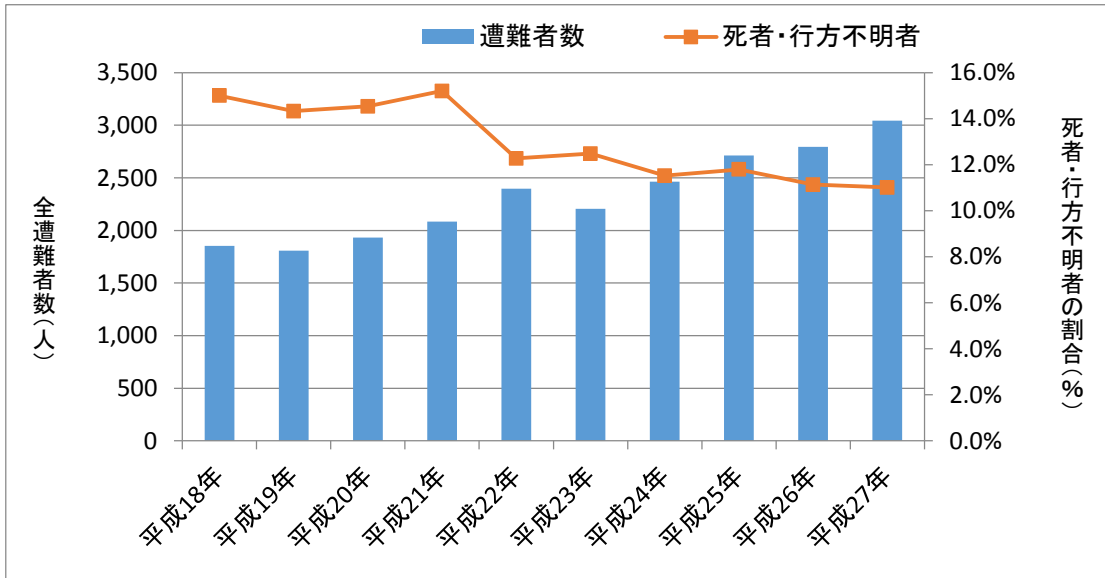


図 発生件数に対する死者・行方不明者の割合

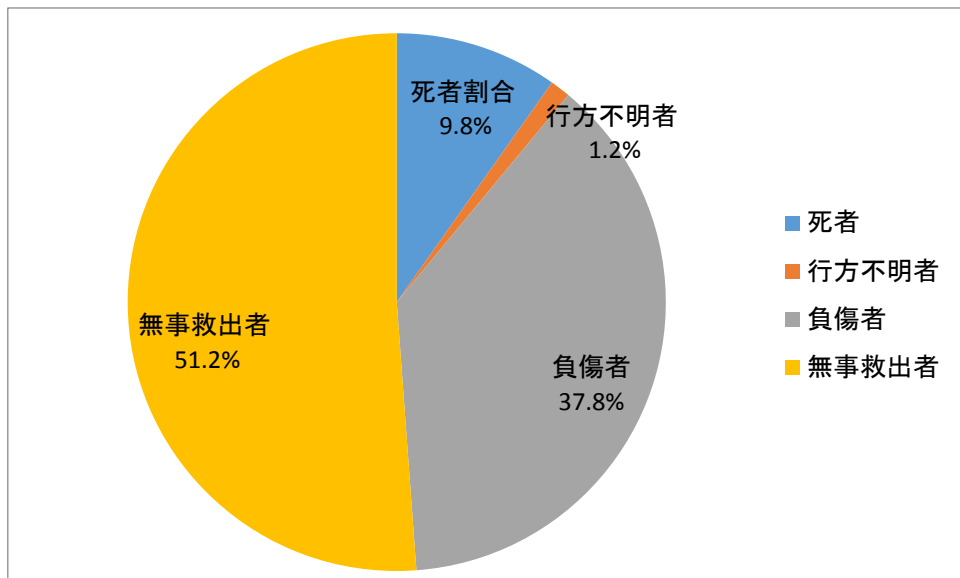
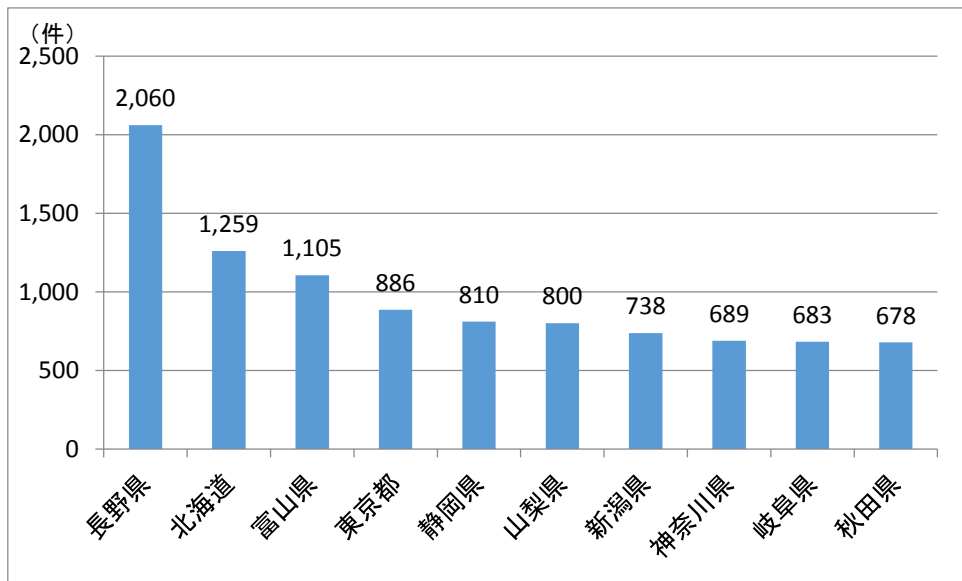


図 過去 10 年間の山岳遭難者状況割合

(2) 都道府県別の発生状況

平成19年から過去9年間において、山岳遭難の発生件数、遭難者数の多い都道府県は次のとおり。

	県名	発生件数		県名	遭難者数
①	長野県	2,060	①	長野県	2,254
②	北海道	1,259	②	北海道	1,552
③	富山県	1,105	③	富山県	1,275
④	東京都	886	④	東京都	1,050
⑤	静岡県	810	⑤	静岡県	997
⑥	山梨県	800	⑥	山梨県	911
⑦	新潟県	738	⑦	神奈川県	888
⑧	神奈川県	689	⑧	兵庫県	883
⑨	岐阜県	683	⑨	新潟県	867
⑩	秋田県	678	⑩	岐阜県	842



図表 遭難発生件数の多い都道府県(H19年～H27年)

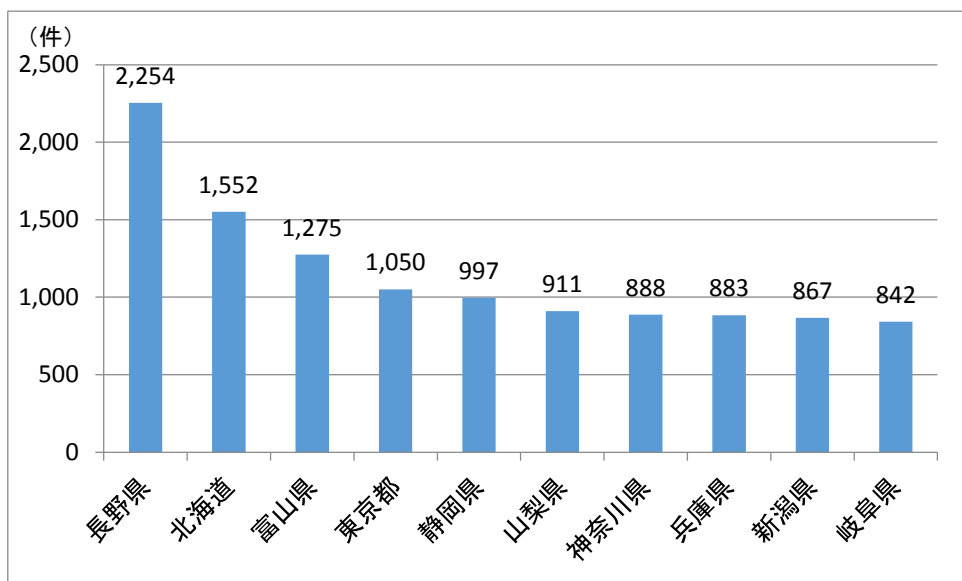


図 遭難者数の多い都道府県(H19年～H27年)

平成 27 年中の山岳遭難は、

○発生件数 2508 件（前年対比+215 件）

○遭難者 3043 人（前年対比+249 人）

○死者・行方不明者（前年対比+24 人）

○負傷者 1151 人（前年対比+110 人）

○無事救出 1557 人（前年対比+115 人）

（平成27年）

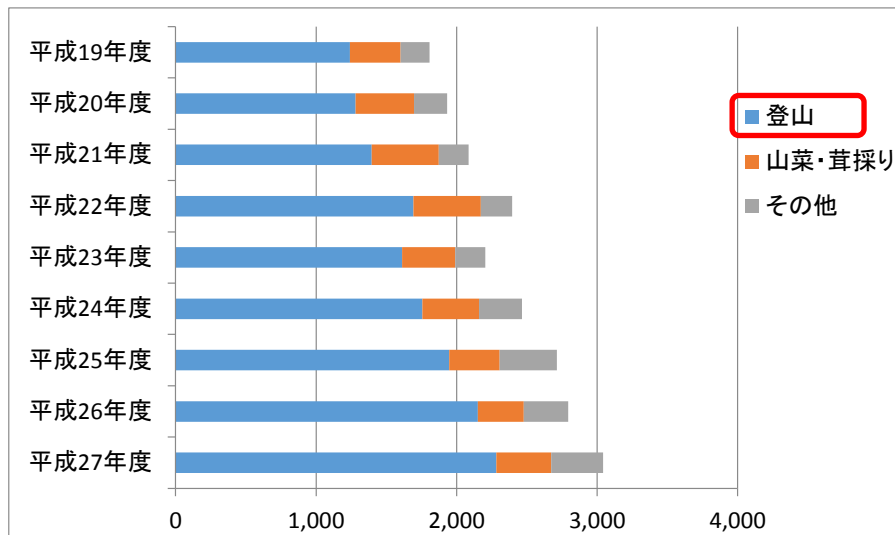
都道府県	発生件数 (件)	遭 難 者 数 (人)				
		死者	行方不明者	負傷者	無事救出	
北海道	175	235	12	3	50	170
青森県	66	76	6	3	19	48
岩手県	47	50	5	1	25	19
宮城県	17	18	1		7	10
秋田県	67	80	9	4	22	45
山形県	79	82	8	2	38	34
福島県	82	95	8	1	41	45
東京都	135	155	5	1	68	81
茨城県	22	32	2		11	19
栃木県	62	70	6		40	24
群馬県	120	142	11	1	83	47
埼玉県	62	89	7		26	56
千葉県	9	20				20
神奈川県	93	111	9		42	60
新潟県	123	147	21	2	75	49
山梨県	107	124	25	1	58	40
長野県	273	300	58	4	132	106
静岡県	114	129	8	3	48	70
富山県	136	156	13	2	84	57
石川県	24	24	4		8	12
福井県	23	55	5		10	40
岐阜県	93	117	13	3	41	60
愛知県	8	10			3	7
三重県	61	80	8	2	21	49
滋賀県	60	79	9	1	29	40
京都府	22	30	4	1	7	18
大阪府	10	14			5	9
兵庫県	92	111	10		39	62
奈良県	48	62	12	1	14	35
和歌山県	7	10	3		1	6
鳥取県	27	34	1		17	16
島根県	7	8	2		1	5
岡山県	6	11	1			10
広島県	19	22	2		8	12
山口県	5	5			1	4
徳島県	14	16	1		4	11
香川県	5	6		1		5
愛媛県	25	26	2		9	15
高知県	4	5	1			4
福岡県	28	34			7	27
佐賀県	9	12			3	9
長崎県	10	11			5	6
熊本県	19	37	2		10	25
大分県	51	68	2		18	48
宮崎県	10	11			4	7
鹿児島県	32	34	2		17	15
沖縄県	0					
合計	2,508	3,043	298	37	1,151	1,557

(3) 目的別

平成19年から過去9年間の全遭難者について、目的別にみると登山（ハイキング、スキー登山、沢登り、岩登り）が増加しており、平成27年度には75.0%と最も多く、次いで山菜・茸採りが12.8%を占めている。

また、態様別にみると、道迷いが増加しており平成27年度には39.5%と最も多く、次いで滑落が16.5%、転倒が15.3%を占めている。

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	構成比
登山	1,241	1,281	1,395	1,693	1,612	1,756	1,947	2,151	2,283	75.0%
登山	996	1,087	1,165	1,386	1,393	1,499	1,645	1,828	2,048	67.3%
ハイキング	126	101	121	188	101	139	150	188	106	3.5%
スキー登山	60	51	56	63	53	60	61	58	57	1.9%
沢登り	32	18	33	34	40	34	48	43	39	1.3%
岩登り	27	24	20	22	25	24	43	34	33	1.1%
山菜・茸採り	360	417	479	480	378	403	360	328	391	12.8%
その他	207	235	211	223	214	306	406	315	369	12.1%
合計	1,808	1,933	2,085	2,396	2,204	2,465	2,713	2,794	3,043	100.0%



図表 目的別山岳遭難者数の推移

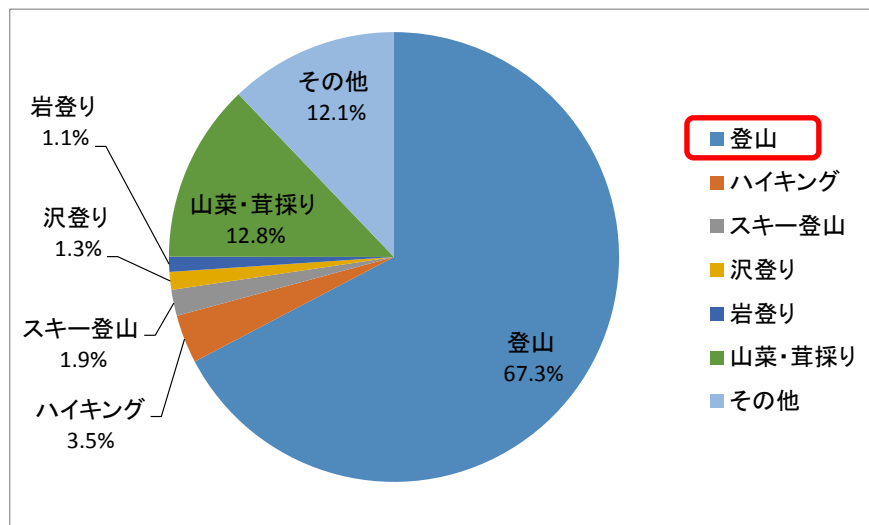
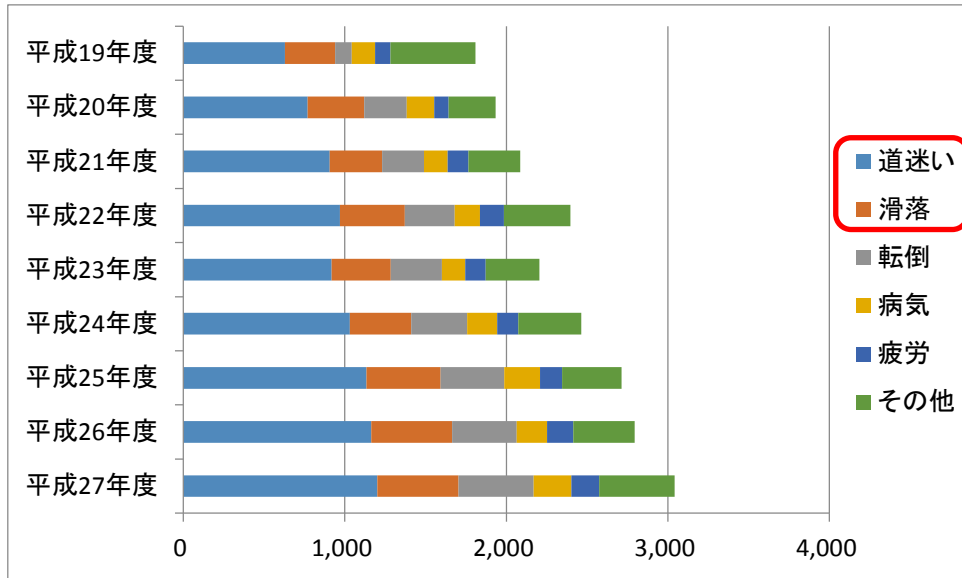


図 過去9年間の目的別山岳遭難者割合

(4) 態様別

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	構成比
道迷い	628	769	906	970	917	1,031	1,134	1,163	1,202	39.5%
滑落	312	350	325	402	367	380	460	501	501	16.5%
転倒	102	265	259	309	317	346	393	401	467	15.3%
病気	146	170	146	155	145	186	221	187	232	7.6%
疲労	94	89	129	149	127	132	137	162	172	5.7%
その他	526	290	320	411	331	390	368	380	469	15.4%
合計	1,808	1,933	2,085	2,396	2,204	2,465	2,713	2,794	3,043	100.0%



図表 態様別山岳遭難者数の推移

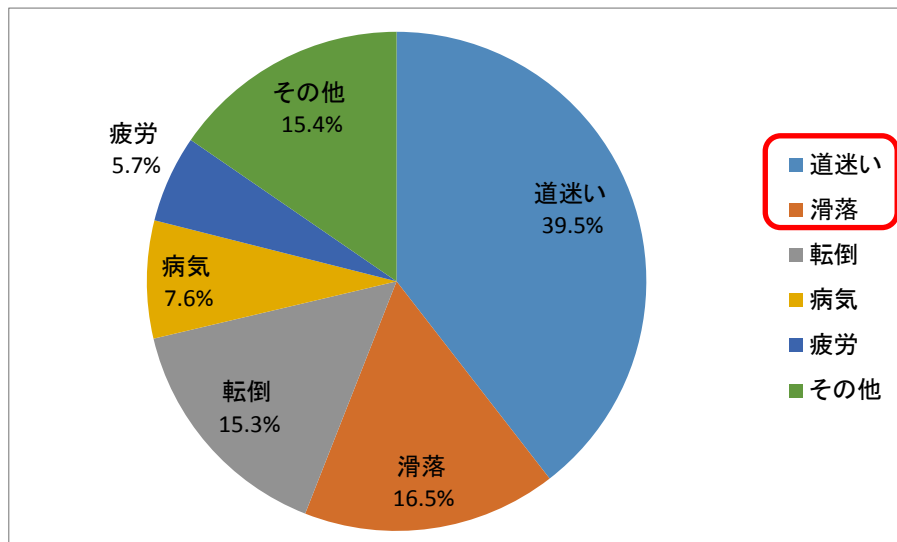
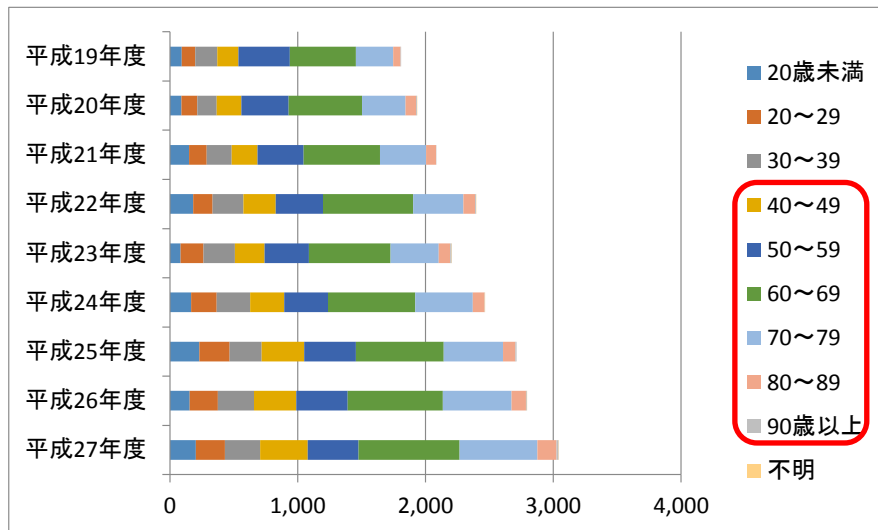


図 過去9年間の態様別山岳遭難者割合

(5) 年齢層別

40歳以上の遭難者の割合は、平成19年より半数以上を占めている。そして、平成27年には40歳以上の遭難者が2334人と全遭難者の76.7%をしめており、このうち60歳以上が1565人と全遭難者の51.4%を占めている。また、平成27年では60歳以上の死者・行方不明者が234人と全死者・行方不明者の69.9%を占めている。

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	構成比
20歳未満	92	90	149	181	81	165	230	153	201	6.6%
20～29	104	123	137	152	181	199	236	222	228	7.5%
30～39	173	152	197	241	246	263	251	281	277	9.1%
40～49	167	193	201	254	231	267	332	333	372	12.2%
50～59	401	370	361	369	347	343	406	402	397	13.0%
60～69	518	576	598	706	639	681	686	744	791	26.0%
70～79	291	340	360	392	378	451	466	537	609	20.0%
80～89	59	81	79	94	90	92	97	114	151	5.0%
90歳以上	3	7	3	6	10	3	9	6	14	0.5%
不明	0	1	0	1	1	1	0	2	3	0.1%
合計	1,808	1,933	2,085	2,396	2,204	2,465	2,713	2,794	3,043	100.0%



図表 年齢層別山岳遭難者数の推移

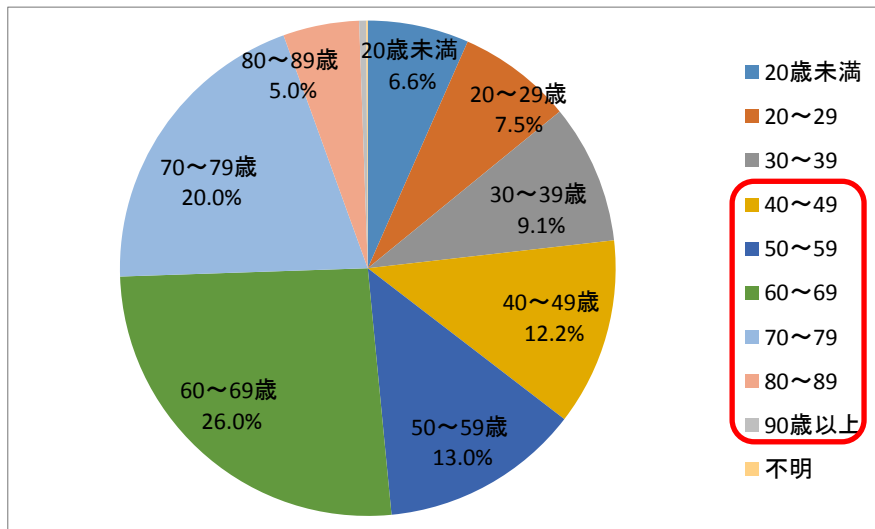
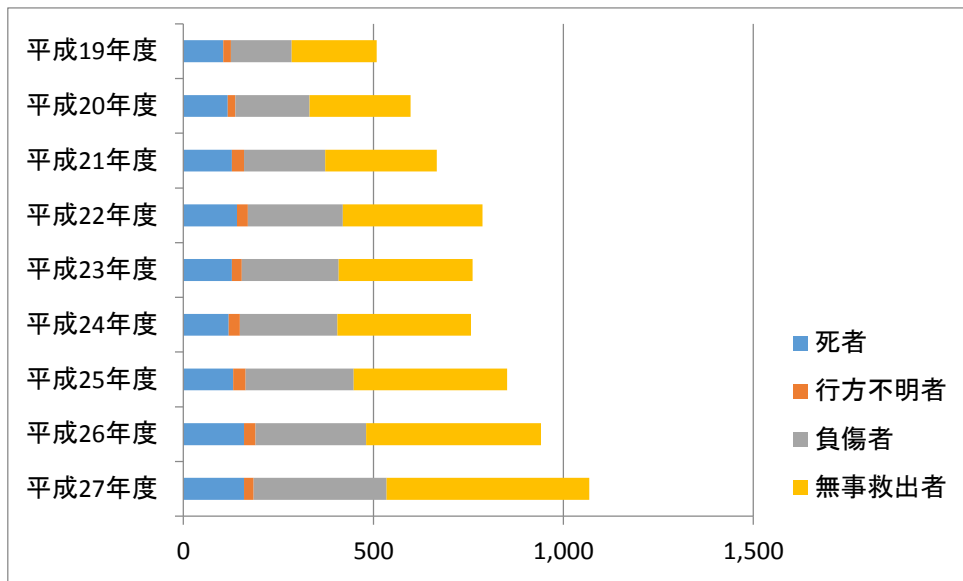


図 過去9年間の年齢層別山岳遭難者割合

(6) 単独登山の遭難状況

単独登山は、平成19年と平成27年を比較すると2倍に増えている。平成27年度の単独登山（目的が「山菜・茸採り」他も含む）における死者・行方不明者は185人で、全単独遭難者の17.3%を占めており、複数（2人以上）登山における遭難者のうち死者・行方不明者が占める割合（7.6%）と比較すると約2.3倍となっている。

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	人数	構成比
遭難者	509	598	667	787	761	757	852	941	1,068	100.0%
死者・行方不明者	125	137	160	170	154	149	164	190	185	17.3%
死者	105	117	128	141	128	119	131	160	160	15.0%
行方不明者	20	20	32	29	26	30	33	30	25	2.3%
負傷者	160	195	213	250	255	256	284	291	350	32.8%
無事救出者	224	266	294	367	352	352	404	460	533	49.9%
全遭難者に占める単独遭難者の割合	28.2%	30.9%	32.0%	32.8%	34.5%	30.7%	31.4%	33.7%	35.1%	-



図表 単独遭難者遭難者数の推移

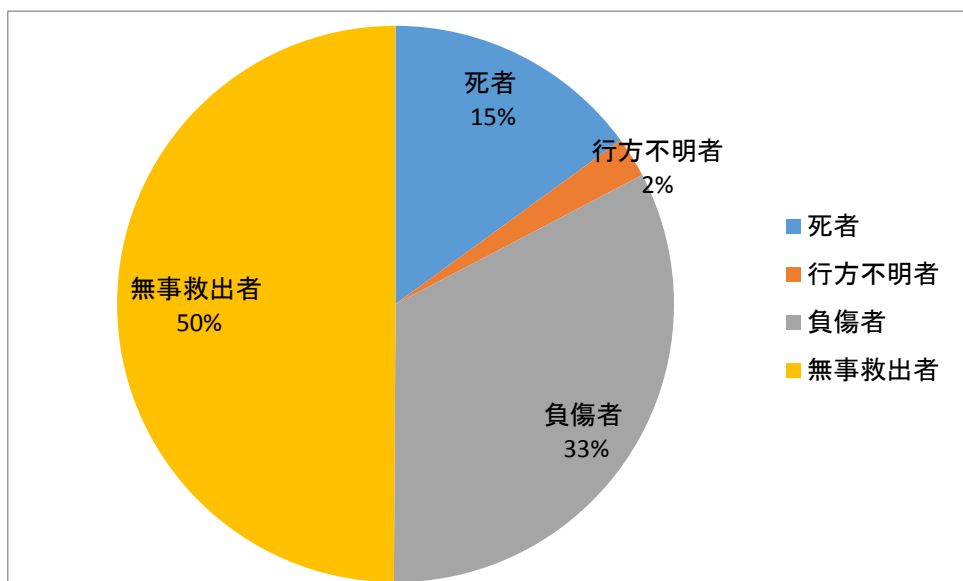


図 過去9年間の単独遭難者状況割合

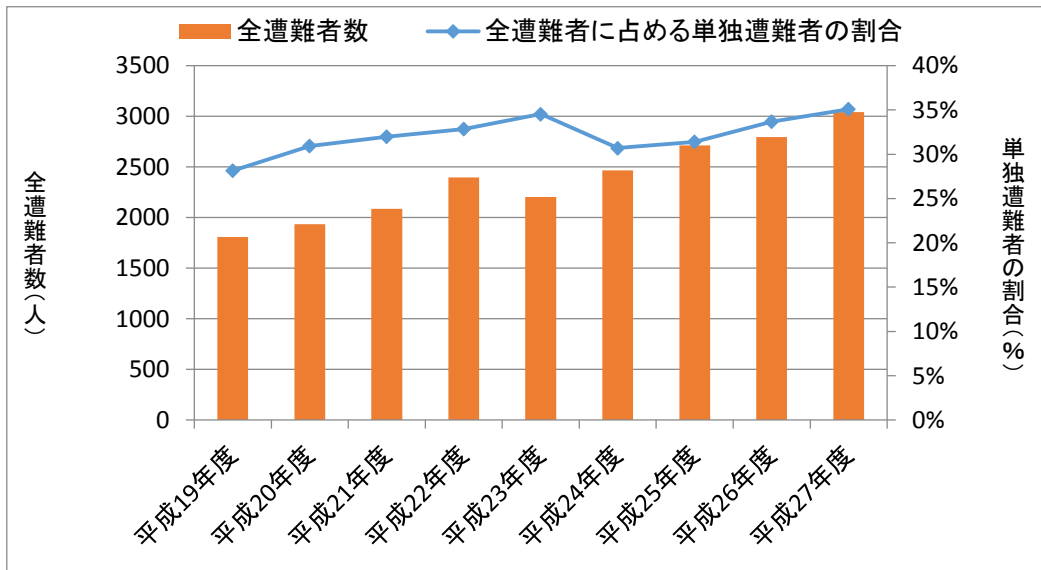
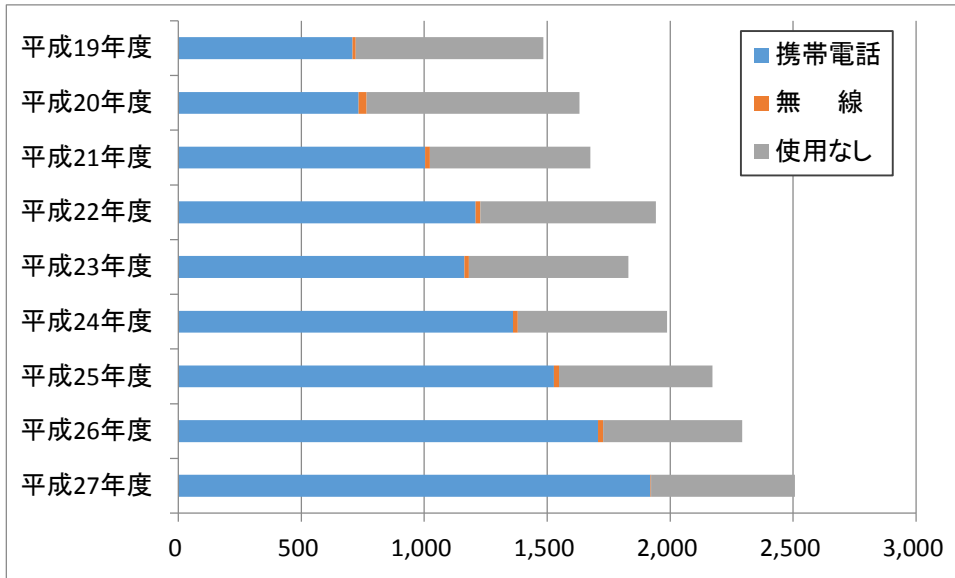


図 全遭難者数に対する単独遭難者の割合

(7) 通信手段の使用状況

携帯電話の普及に伴い、救助要請の通信手段に携帯電話を使用する割合は高くなっている。平成27年には、全発生件数2508件の76.6%が遭難現場から通信手段（携帯電話、無線）を使用し、救助を要請している。

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
	件数	件数	件数	件数	件数	件数	件数	件数	件数	構成比
発生件数	1,484	1,631	1,676	1,942	1,830	1,988	2,172	2,293	2,508	-
使用あり	722	766	1,023	1,229	1,181	1,380	1,548	1,728	1,920	76.6%
携帯電話	708	733	1,003	1,209	1,163	1,361	1,527	1,707	1,920	76.6%
無線	14	33	20	20	18	19	21	21	2	0.1%
使用なし	762	865	653	713	649	608	624	565	586	23.4%



図表 通信手段使用状況の推移

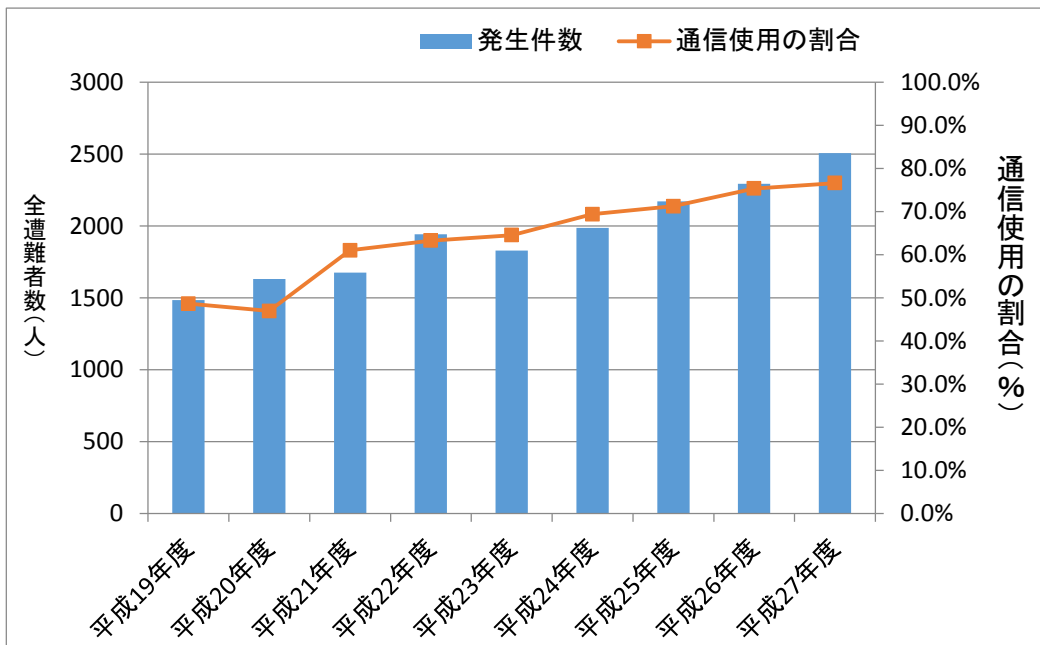


図 発生件数に占める通信手段使用割合

3. 主な山域別の遭難概要

(1) 態様別

平成 27 年度中の主な山域（12 か所）における遭難状況をとりとまとめた。

①北アルプス北部、②北アルプス南部、③八ヶ岳、④中央アルプス・乗鞍・御嶽、⑤南アルプス、⑥奥多摩・奥武蔵、⑦奥秩父・大菩薩、⑧丹沢・道志、⑨富士山周辺、⑩白山・北陸、⑪鈴鹿・伊吹、⑫大峰・台高

平成 27 年の全国統計によれば、遭難態様は「道迷い」、「滑落・転倒」、「病気・疲労」が大半を占め、約 88%となっている。主要な山域でも「滑落・転倒」が約 4 割を占め、登山者の歩行技術、行動技術に負うところが大きい。

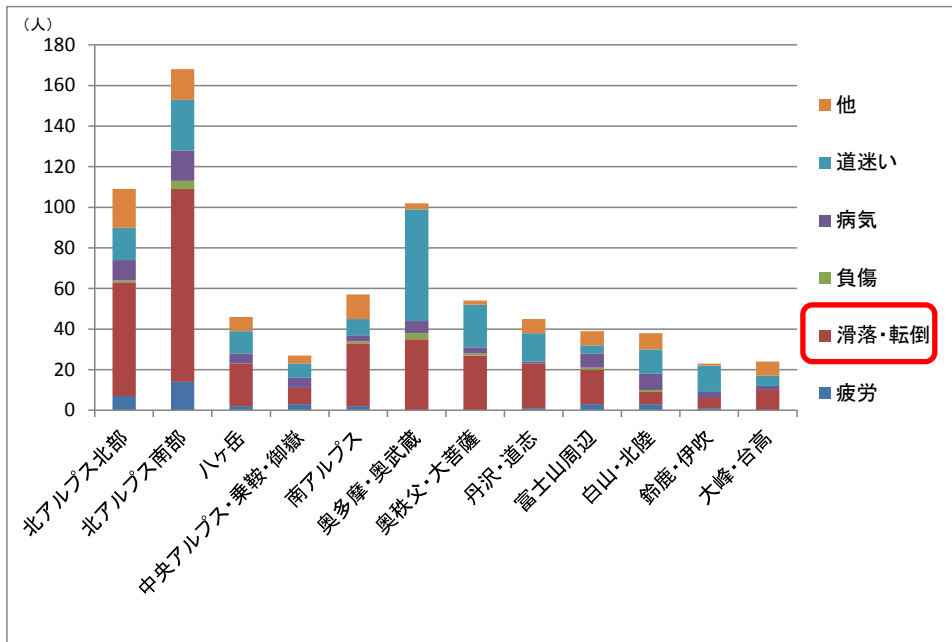


図 態様別山岳遭難者数(平成 27 年)

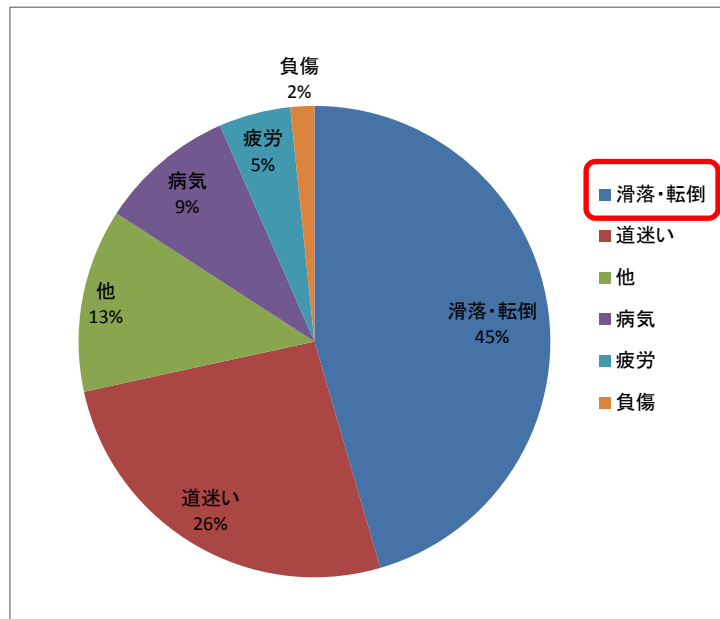


図 態様別山岳遭難者の割合(平成 27 年)

(2) 年齢層別

1990年代半ば以降は中高年の登山ブームと、ここ数年で若い世代の登山者も加わり始め、遭難は増加していった。人気の高い北アルプス北部、北アルプス南部では40代～60代の遭難者が6割以上を占める。

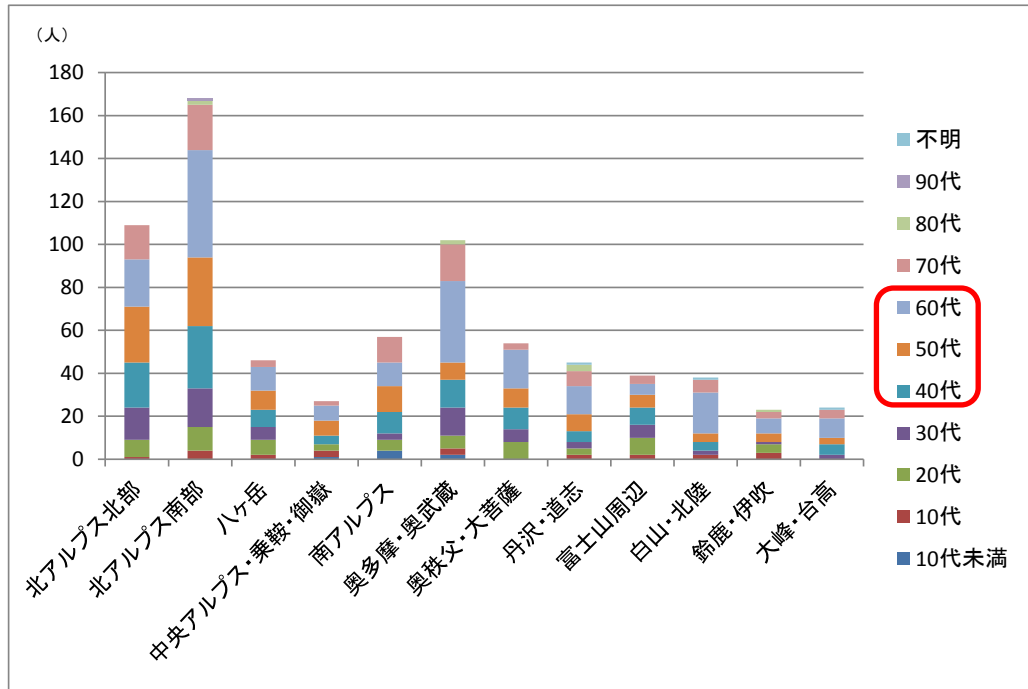


図 年齢層別山岳遭難者数(平成 27 年)

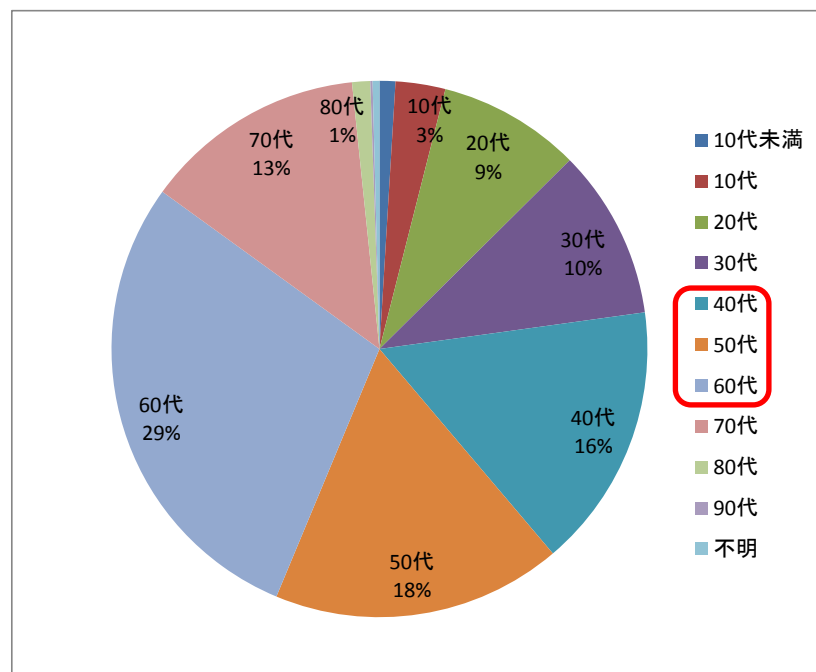


図 年齢層別山岳遭難者の割合(平成 27 年)

(3) 遭難状況

主な山域での、遭難者の年齢構成をみると、60代が最多、次いで50代、40代と続く。40代から70代を合わせると約8割を占める。遭難死亡者の比率で見ても、40代から70代を合わせると約8割を占めている。

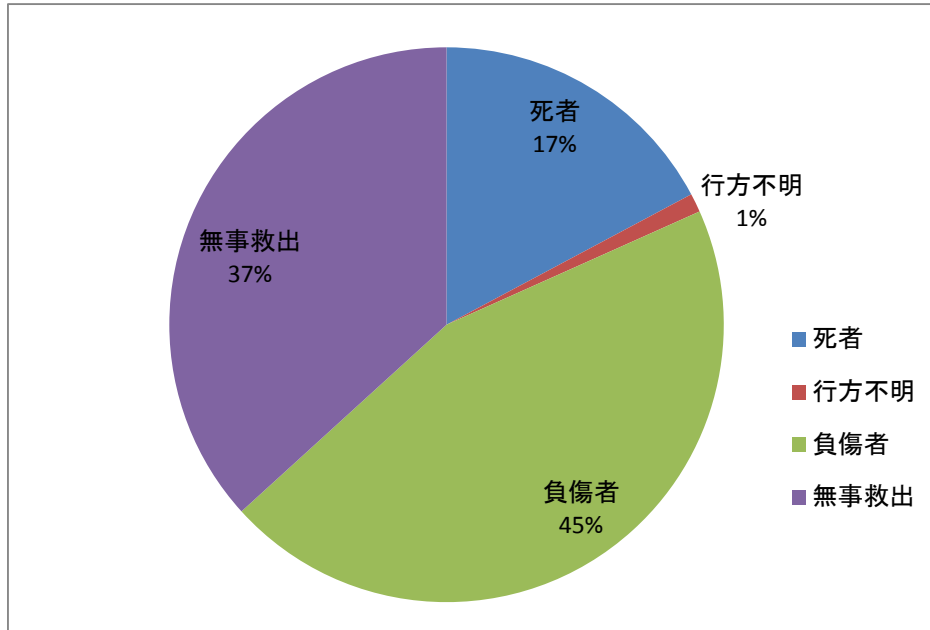


図 登山者の遭難状況(平成 27 年)

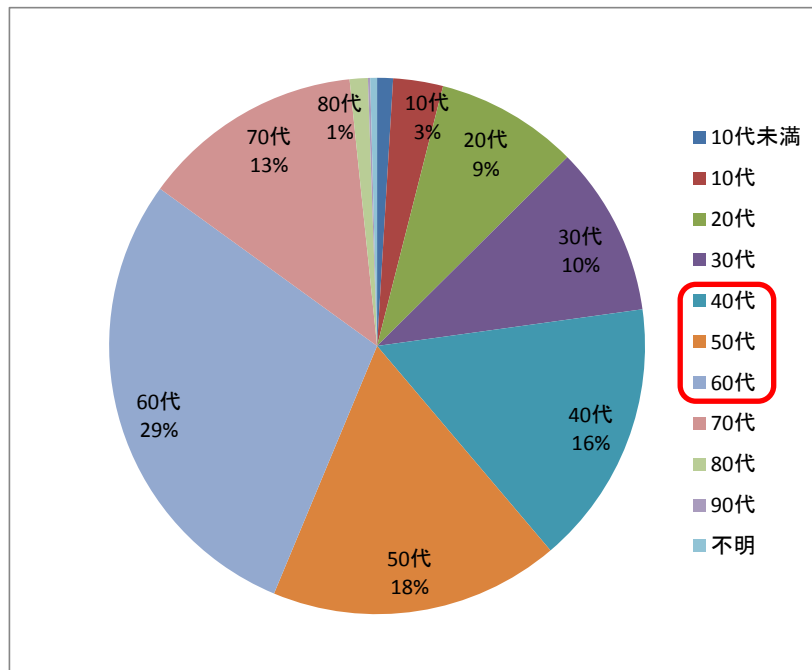


図 年齢層別遭難者の割合(平成 27 年)

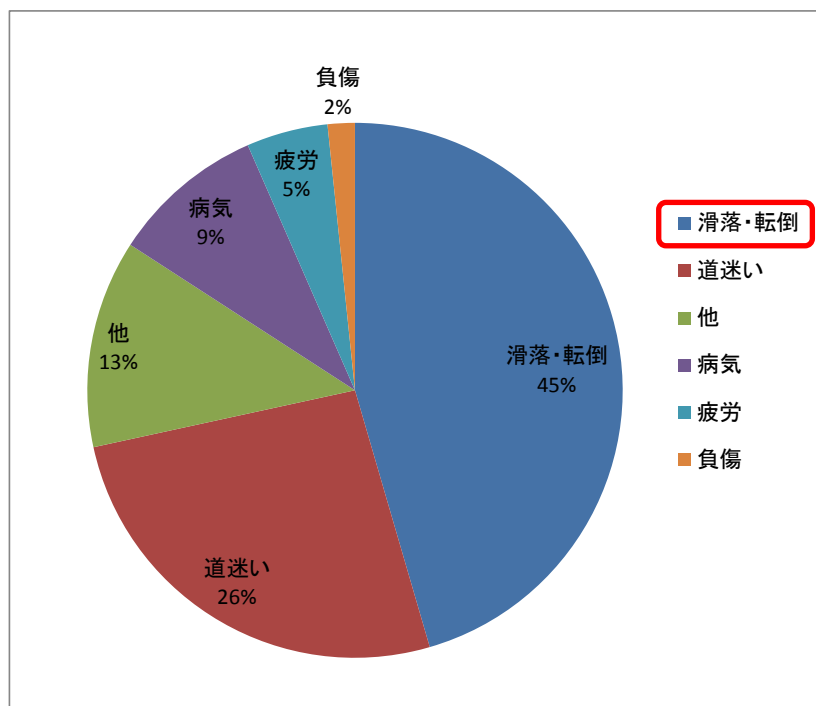


図 態様別遭難者の割合(平成 27 年)

※都道府県別の遭難者データは「警察庁生活安全局地域課」より

※国内の主な山域別遭難者データは「登山白書 2016., ヤマケイ登山総合研究所」より

※屋久島町遭難者データは「屋久島資料」より

※平成 27 年度屋久島における山岳部利用者数データは「平成 27 年度屋久島世界自然遺産地域における利用の適正化に向けた検討及び利用に関するモニタリング実施業務 報告書」アンケート調査結果（全体での回答数が 50 件以上のルート）より

※屋久島全体の入込数は「熊毛支庁及び種子屋久観光連絡協議会」より

※自然休養林データは「屋久島レクリエーションの森保護管理協議会」より

※縄文杉登山者は「環境省屋久島自然保護官事務所」による。平成 21 年 3 月～4 月、平成 27 年 1 月～3 月は欠測期間あり。宮之浦岳方面において、平成 24 年度 1 月、2 月、12 月及び平成 25,26 年は機器不調によりデータ欠測